

<令和5年度>

鳥取県文化芸術事業

評価報告書

《本編》

鳥取県文化芸術事業評価委員会

～ 目 次 ～

1 総合評価	1
2 実施結果概要	
(1) 実施事業一覧	3
(2) 評価の体系	3
3 事業別評価	
(1) 第21回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2023 東部地区事業（東部地区企画運営委員会）	4
(2) 第21回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2023 中部地区事業（中部地区企画運営委員会）	10
(3) 第21回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2023 西部地区事業（西部地区企画運営委員会）	15
(4) とっとり郷土芸能まつり2023（鳥取県地域社会振興部文化政策課）	18
(5) 第67回鳥取県美術展覧会（鳥取県地域社会振興部文化政策課）	22
(6) 第40回アザレア音楽祭2023（鳥取県音楽祭サミット、アザレア音楽祭実行委員会）	29
(参考)	
・鳥取県文化芸術事業評価委員会 委員名簿	34
・鳥取県文化芸術事業評価委員会 事業別評価報告書執筆担当一覧	35
・鳥取県文化芸術事業評価委員会 評価委員会の開催状況	35
・鳥取県文化芸術事業評価委員会設置要綱	36

(別冊) 令和5年度 鳥取県文化芸術事業 評価報告書《資料編》

1 総合評価

【本年度の評価方法】

- ・評価方法について、事業実施者の策定した取組目標や行動計画に基づき、それらの達成度を評価する構成は基本的に昨年度（従来）と同様であり、評価の段階は「達成」、「概ね達成」、「一部達成」、「未達成」の4段階とし、それぞれ3点、2点、1点、0点と数値化し、達成度を確定した。また、各事業の総括を行い、「成果」、「課題」、「その他事業に関する意見、感想」に事業の全体評価を評価委員の視点で記載している。
- ・取組目標及び行動計画の設定並びに達成度評価の視点として、県が策定している「アートピアとっとり行動指針」に掲げる施策の方向性との関連及び前年度の事業評価での課題に対する対応がより明確となるよう、事業評価シートの作成にあたり留意すべき事項を事業実施者と評価委員で共有し、本年度の事業評価を実施した。具体的には、「取組目標」の設定にあたっては、同指針の内容と前年度の課題を十分に踏まえ、「行動計画」には、「掲げる取組目標を達成するための具体的取組事項」、「そのために工夫した事項」、「前年度からの見直し事項」等を具体的に記載し作成することとしている。

【本年度の事業評価】

- ・5月連休明けに新型コロナウイルスの取り扱いが変更され多くのイベントが再開される中、事業実施日が他のイベントと重なり集客に苦慮するなどの状況も見受けられる事業もあったが、どの事業もアートに親しむ環境づくりに一定の成果をあげることができたことは評価に値する。また、それぞれの事業で昨年度課題となっていた事項に対して解決に向け努力をされ、事業の充実につながられたことについて、関係の皆様から敬意を表す。

（1）とりアート事業（「とりアート 2023 東部、中部、西部地区事業」（3事業）

- ・東部地区は、「対話型鑑賞アートノカタリバ」といった新企画や中・高校生をはじめとする若いアーティストの積極的な登用などにより「初めての来場者」の割合や若者・家族連れの来場者数が増加し、活気あふれるものとなった。来場者の滞在時間を増やすような工夫の検討が求められる。
- ・中部地区は、全体のメインターゲットを「子ども・ファミリー層」に設定し、企画もそれを全面に打ち出した内容としたことで、例年以上に親子連れ・家族連れが多い活気がある催しとなった。特に、次世代育成の取組において「中部少年少女合唱団 MIRAI」「中部ウインドアカデミー@サックス」「リトルバレリーナ」のコラボコンサートの開催は、主催者にとっても出演者にとっても取組のステップアップにつながる大きな成果となった。今後、美術館のオープンに伴い、中部エリアの注目度も上がり、長期的に芸術がもっと身近になり、文化的な盛り上がりなど人々の意識の変化も予想される中、これまで培ってきた運営経験や人材育成が次のステージにつながっていくことを期待する。
- ・西部地区は、「いつものまちで文化する」のテーマに沿って、プラネタリウムなど施設の特性を生かした魅力的なプログラムを展開し、親子連れをはじめ様々な年齢層の県民にアート体験が気軽にできる機会を提供した。一方、広報の面でプログラムの魅力的な内容を事前に十分に伝えることができていなかった点が少し残念であった。

（2）鳥取県文化政策課主催事業（「とっとり郷土芸能まつり」、「第67回鳥取県美術展覧会」）（2事業）

- ・とっとり郷土芸能まつりは、従来の伝統芸能まつりと鳥取県文化振興財団が実施してきた鳥取県青少年郷土芸能の祭典との合同事業として実施された。10代以下から高齢者まで幅広い世代の出演があり、地域に伝わる郷土芸能の素晴らしさや郷土芸能がもたらす人とのつながりの大切など、郷土芸能を継承し守っていくことの必要性が伝わる公演となった。多くの観客が来場した中、当日の運営上の課題はあったが、後継者不足といった課題を抱える団体が増加する中で今後の事業のあり方を考える上でも参考となる成果が得られるものとなったことは評価できる。

・鳥取県美術展覧会は、SNS 等を活用した積極的な作品募集などが奏功し、高校生など若い世代からの出品者が増加した。一方、来場者については若い世代の取り込みが依然として課題であるとともに、会期が進んでいくにつれて開催情報の周知が行き届きにくくなっており、引き続き SNS 等の活用や地元自治体との連携などより効果的な広報についての工夫が求められる。

（3）鳥取県文化団体連合会加盟団体主催事業（第 40 回アザレア音楽祭 2023）

・40 回という節目を迎え、その実績と成果が積み重なった全国に類を見ない音楽祭へと成長した姿が感じられる取組となった。クラシック音楽をメインに優れた音楽芸術体験を提供し、地域社会の芸術文化のレベルアップに大いに貢献するとともに、初夏の倉吉を音楽で彩る地域活性化イベントとしても定着している。今後も長く続けていくために、運営人材の確保策としての運営委員の公募など、未来に向けての持続可能な仕組みづくりを進めていくことが求められる。

【今後の評価に向けて】

・引き続き取組目標及び行動計画の設定並び達成度評価の視点として、県の第 2 期「アートピアとっとり行動指針」に掲げる施策の方向性との関連がより明確となるよう、事業評価シートの作成にあたり留意すべき事項を事業実施者と評価委員で共有し、事業評価を実施していく。

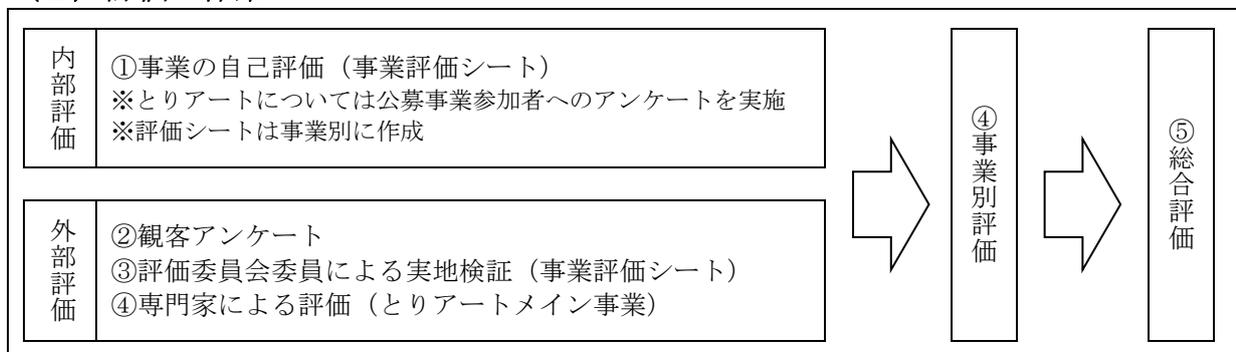
令和 6 年 3 月
鳥取県文化芸術事業評価委員会
会 長 山 本 仁 志

2 事業実施概要

(1) 実施事業一覧

番号	主体	団体名	事業名	実施日	実績				
					入場者数	アンケート配布数	アンケート回収数	アンケート回収率	満足度
1	鳥取県総合芸術文化祭実行委員会	東部地区企画運営委員会	第21回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2023 東部地区事業	令和5年 11月18日(土) ～19日(日)	1,881人	枚	枚	41.5%	83.7%
2		中部地区企画運営委員会	第21回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2023 中部地区事業	令和5年 11月18日(土) ～19日(日)	3,903人	枚	枚	47.1%	82.2%
3		西部地区企画運営委員会	第21回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2023 西部地区事業	令和6年 1月7日(日) ～8日(月・祝)	1,095人	枚	枚	45.6%	92.4%
4	鳥取県	地域社会振興部文化政策課	とっとり郷土芸能まつり2023	令和5年 10月21日(土)	750人	枚	枚	49.4%	90.2%
5			第67回鳥取県美術展覧会	令和5年 9月16日(土) ～11月3日(金)	7,309人	枚	枚	50.6%	82.9%
6	鳥取県文化団体連合会	鳥取県音楽祭サミット、アザレア音楽祭事務局	第40回アザレア音楽祭2023	令和5年 5月14日(日)	550人	枚	枚	48.0%	93.0%

(2) 評価の体系



3 事業別評価

第 21 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2023 東部地区事業

令和 5 年 11 月 18 日（土）・19 日（日）とりぎん文化会館

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標 （※1）	行動計画 （※2）	達成度（※3）及び 評価理由（※4）	達成度及び評価理由
「アート」 に親しむ ～環境づ くり～	誰もが文化 芸術に親し むことがで きるように するための 環境づくり	子どもから高齢者まで、 障がいの有無にかかわらず、 そして、アートに対する 経験・理解の差にかかわら ず、アートの「本質」と「実 感」に触れて楽しむことが できるよう、多様なジャンルの 企画を実施する。 （対話型鑑賞、フクシメアート Weekによる展示、手話通訳 による同時通訳）	達成度：達成 【成果】 実施者・来場者ともに、例年と 比較してもステージ、展示、ワ ークショップいずれも若年層 の参加が多く見られた。それに 連動する形で、来場者アンケ ートからは「初めて来場した」 が 64.1%で、昨年・一昨年の 40%台と比べて大きな変化と なった。新たな試みでもある自 主企画「対話型鑑賞」では、ア ートの「本質」と「実感」の体 験を提供することができた。そ れは、全体においても当てはま ることであり、アートに対する 事前経験・理解の差に関わら ず一人ひとりがそれぞれに楽 しむことができる文化芸術の時 間を提供することができた。 障がいと共に生きる人々のア ートが鳥取市中心市街地の商 店街を彩っていく取り組みの 「フクシメアート WEEKs 2023」 との連携により、これまで以 上に障がいの有無に関わらず 多様な展示を実施することが できた。 参加者・運営スタッフ・ボラン ティアスタッフなど、様々な年 代の方々が楽しみながら積極 的に実施に関わることができ た。 そして、引き続き、手話通訳 による同時通訳、パンフレット への音声コード掲載を行うこ とにより、文化芸術活動にア クセスしやすい環境を整備 することができた。	達成度：達成 【成果】 実施者・来場者いずれも若 年層の割合が大きく伸びて いる。中・高・大学生等の展 示、発表が増えたことで、と りアートの新規来場者の増 にもつながったと考える。家 族連れ、親子連れも多くみ られた。 アートという切り口で、様 々なジャンルや表現・個性・ 多様性、奥行きを感じた。 フリースペースのステージ は、黒のバックボードを設 置するなどの工夫があり、会 場の空間づくりに配慮され ていた。また、客席にテー ブル席が設けられていて、 家族連れやグループで食事 をしながら鑑賞をされていた。 手話通訳もあり、多くの 方が足を止め、観客が絶 えることがなかった。 イベントホールの展示は、 中・高生、地元の作家、障 がいがある方の作品全て見 ごたえがあった。「対話型 鑑賞」アートノカタリバは、 今後も取り入れ、いろんな 人に体験してほしい。 「フクシメアート WEEKs 2023」との連携により、 障がいの有無に関わらず 多様な展示ができたと思 う。
		地域住民および参加者へ それぞれのアーティスト の魅力を知ってもらい、 且つ、来場を促すことを 目的とし、HP・SNS（とり アート公式 Instagram・X （旧 Twitter））による情 報発信を強化する。 同時に、上記のデジタル 媒体に加え、東部エリア の施設への積極的なチ ラシ・ポスター配付、の ぼり設置、FM 鳥取による ラジオ CM 放送・番組生 出演、	達成度：概ね達成 【成果】 新規来場者に対して発信 することを目的とし、SNS （Instagram 広告）・とり アート SNS の積極的な活 用に努めた。また、委員 をはじめ、出演者等の 参加者にも協力を仰ぎ、 SNS 発信を行った結果、 新規鑑賞は、約 64%と 半数を超え、とりアート が持つネットワークとは 異なる層にも情報を届 けられる取り組みであ った。また、FM 鳥取 （ラジオ番組）に出演	達成度：概ね達成 【成果】 新規来場者が多かった こと、若年層の来場者 が多かったことはとも 評価できる。 若い層には、SNS 活 用等の効果も大きか ったと思うが、ポ スターやチラシの紙 媒体や出演者のロ コミ PR の効果が 大きいことは、参 加者アンケートか らも明確であり、 のぼり設置・ポ スター貼付・チ ラシ配架を積極 的に行われたこ とは評価できる。

		<p>を行うことで、より多くの方にPRを実施する。そして、アーティスト自らによるチラシ・SNSを活用した口コミ広報を行うことで、新規来場者獲得を狙う。</p>	<p>者・出展者にも出演をいただいたことで、より親しみを感じてもらえる切り口で広報ができたと考える。引き続き、会場周辺(市内)へののぼり設置・ポスター貼付・チラシ配架を積極的に行った。</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日程として、他イベントとの競合も激しく、従来の広報で会場いただいた方に対して情報を届ける広報に及ばなかった。開催日に競合するイベント状況を把握すること、そして、それを踏まえて「攻めの広報」をする必要があった。従来とは異なる視点の広報として「SNS」を中心とした情報発信を強化するという方針を出したが、元々のフォロワー数、そして、とりアート SNS の認知度の低さも影響し、大きな戦力とはならなかった。 <p>従来行っていた「新聞折込」に代わる広報媒体を検討し実行する必要性が大いにあったと同時に、「家族や知人が出演・出展しているから」という理由で来場した方が約 33%を占めているため、とりアートというイベント自体に対する興味・関心を高めてもらえるようなきっかけづくりについて、改めて検討する必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体を通した企画の充実度に対して、例えば、対話型鑑賞であればその企画の魅力をチラシ、パンフレット、SNS等の広報媒体で十分に伝えることができなかった。そして、個々の企画がもつ内容の良さを伝える十分な広報発信までは及ばなかった。 	<p>【課題】</p> <p>当日は、他のイベントとの競合や、市内小学校の事業とも重なっていた。開催日については、慎重に検討していただきたい。</p> <p>新聞折込の効果は大きいと思う。特に今回のチラシの高校生の作品はインパクトがあったので、目を引くことができたのではないかな。</p> <p>新たな試みである「対話型鑑賞」や「フクシ×アート WEEKs 2023」との連携については、事前にもっとPRが必要と感じる。</p> <p>初日の小ホール公演の「WEAVE THE GROOVE」は素晴らしいプロアーティストのステージであったが、観客は出演した地元の中・高・大学生の関係者が多かったようで、もっと広くPR出来たらと感じた。</p>
<p>【前年度の課題】 なし</p>				
<p>「アート」が育む・「アート」を育む～人づくり～</p>	<p>子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会の充実</p>	<p>地域団体や教育機関との連携をし、これからの鳥取の文化芸術を担っていく若年層の出演・参加を促す。</p> <p>(中学生・高校生・大学生によるバンドやダンス、書道パフォーマンス、中学生・高校生の作品展示)併せて、東部地区小学校、中学校及び特別支援学校等にポスター・チラシを配布し、若年層、親子連れの来場を促進する。</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>オープニングイベントは、部員数 2 人の八頭高書道部による書道パフォーマンスと THE SEED(一般団体/マーチングバンド)の生演奏でのコラボレーションにより相乗効果が生まれ、来場者を魅了したステージとなった。事前打合せ～練習～本番まで連携した形で取り組んだことにより、参加者・来場者にとっても有意義な時間となった。</p> <p>小ホール公演でも同様に、中学生・高校生・大学生にとって校外での初となる大きな舞台出演の機会提供、そして、プロの</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>オープニングイベントの、高校生の書道パフォーマンスと一般団体であるマーチングバンドのコラボレーションは、大いに盛り上がるステージであった。出演者にとっても、このコラボは、新たな創造体験となったと思う。</p> <p>中・高校生の作品展示での参加は、若年層にとりアートを知ってもらえる貴重な機会となった。</p> <p>小ホール公演でも、中・高・大学生にとって校外での大きな舞台出演の機会提供であり、また、プロの本格的な</p>

			<p>本格的な演奏に触れることで演奏に対しても大きな刺激を与え、これからの可能性を拡大させる大きなきっかけにも繋がった。</p> <p>展示においても、中学生でミニチュア作家の ciel さんは、ブレ企画の「とっとり県民の日×ととりアート 連携企画 2023」（会場：イオンモール鳥取北）での展示をきっかけに、県外での展示の機会を得ることができた。メインビジュアルを担当した高校生の OBAN TAIKA さんは、三味線奏者の信清栄月さんとのコラボステージ&ミニトークショーも行う等、これからの期待される若いアーティストの活躍を支援することができた。</p>	<p>演奏に触れることで大きな刺激となったことと思う。</p>
		<p>ファミリー層および若年層をターゲットとした企画を実施することで、より幅広い層に関心を持ってもらう。</p> <p>（親子向けの歌・文学ものづくりの体験、学生によるステージパフォーマンスや作品展示）</p> <p>小ホール企画では、プロと県内学生が出演する「バンド」企画を行うことで、若い人・男性の観客の来場を促進する。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <p>ワークショップでは、地域連携企画「わらたべうたであそぼう」や、梨の木工房による木を使用した体験型の「コマづくり」や「つみ木あそび」を実施することにより、“ファミリー層”へのアプローチができた。また、ステージ企画においても、ダンスパフォーマンス、そして、小ホールでは学生によるバンド出演により、出演者の家族や友人等の来場もあり、例年（R3 年度 13.7%・R2 年度 17.6%）と比べて、10 代後半～20 代前半の来場者が 26.1%と多くの若年層の取り込みへと繋がった。</p> <p>【課題】</p> <p>ファミリー層を狙う必要があったが、開催日は小学校の学校行事と重なってしまい、来場に大きく影響が出た。日程について検討が必要であった。</p> <p>また、より多くのファミリー層が楽しめるように多彩なプログラムで対象のワークショップを増やす、館内環境づくりをすることで、ひとりあたりの滞在時間を長くし、空間・時間を楽しむことができるような会場づくりを行う必要がある。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <p>ファミリー層が参加体験できるワークショップが実施されていた。</p> <p>「わらたべうたであそぼう」には、小さい子供連れの親子が集まり楽しそうだった。また、木を使った「コマづくり」や「つみ木あそび」にも親子連れが見られ、ファミリー層へのアプローチができていた。</p> <p>小ホール公演では学生バンドの出演ということで、出演者の家族や友人が来場され、男性、10 代後半～20 代前半の来場者を増やすことにつながった。</p> <p>【課題】</p> <p>当日は、他のイベントとの競合や、多くの小学校の学習発表会と重なってしまった影響は大きい。やはり、日程の調整は必要である。</p> <p>長時間滞在しても飽きさせないような、公演プログラム、ワークショップ、フードコート活用などの工夫も必要である。</p>
		<p>【前年度の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 若い人、男性の観客が少なく、若い人が関心を持つステージ内容、会場に足を運んでもらうための方策の検討が必要。 		
「アート」で元気に～地域づくり～	地域における文化芸術の活性化	<p>鳥取で既に活躍しているプロアーティストや将来が期待されている若手アーティストを起用し、地域住民が地域の「宝」に触れたり、良さを認識した</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>今回は、県内外を問わず全国で活躍をされているプロアーティストの出演、そして、ステージ・展示共に、小学生未満～大</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>メインビジュアルに高校生アーティストの作品を起用することで、広く知ってもらう機会となった。</p>

	<p>りする場を創出する。 (hacto 氏、Rails-Tereo 氏、OBAN TAIKA 氏等)</p>	<p>学生に出演・出展してもらった。経験値のある大人とのコラボレーションもあり、大きな育成の機会となった。小ホール企画における若手出演者のほとんどが、校外以外での初めての有観客での大舞台ということで貴重な機会の提供ができた。そして、プロのアーティストのステージでは、レベルの高い表現力・演奏力・歌唱力と地元(鳥取)を愛する気持ちを感じることのできる内容となり、地域住民にとって鳥取が持つ“今”そして“未来”の「宝」に触れる機会の提供となった。 来場者は、プロアーティスト、そして、若手アーティストを通して、地域に関心を向ける機会ともなった。</p>	<p>また、小ホールでのプロアーティストのハイレベルなステージは、地元の人材の認識を高めた。中～大学生の若手出演者は、プロとの共演により、大きな刺激を受けたことと思う。</p>
	<p>地域で活動している郷土芸能・伝統芸能団体に注目してもらうため、公募・自主企画の両方面より積極的に募集・依頼をすることで、企画の充実を図る。 (しゃんしゃん傘踊り、落語、和楽器の演奏、和太鼓)</p>	<p>達成度：達成 【成果】 公募・自主企画から、昨年度よりも2ジャンル増え、落語、三味線、箏、和太鼓、傘踊りという郷土芸能・伝統芸能で日々、活動をされておられる方々にご出演をいただき、いずれも高いパフォーマンスレベルで、初めてその芸能に接する人にもそのすばらしさを感じていただけたと感じる。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 今回は落語、三味線、箏、和太鼓、傘踊りとジャンルも増えて、幅広い参加があった。 伝統を受け継いで活動されており、レベルも高く、とりアートへの出演で、初めての人にも注目してもらう機会となった。</p>
<p>【前年度の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷土芸能の団体に参加してもらうため、「公募」の積極的な周知、参加しやすい環境づくりが必要。 ・公募のみならず指名依頼により地域に埋もれている芸能にも光を当てる。 			
達成度集計(※5)		(16/18) ≙ 88.9%	(16/18) ≙ 88.9%

【定量目標・実績】

	目標	実績	(参考) 昨年度実績
① アンケート回収率 (%)	50%	41.5%	43%
② 観客満足度 (%) (※6)	90%	83.7%	91%
③ 入場者数 (名) (※7)	1,500人	1,881人	1,364人

【自己評価総括】

【成果】

年度当初から何度も綿密な打ち合わせや会議を重ねてきた結果、完成度の高いイベント構築ができ、東部地区委員・事務局がそれぞれの個性、能力等の持ち味を生かし、いいチームワークの中で企画運営ができた。コロナからの制限も本格的に明け、スタッフや参加者たちの思いもさらにこもった内容であった。今年度は、撤収時間が例年以上に短く終えることができたが、その理由のひとつに、これまでのとりアート東部地区が積み重ねた多くの出演、出展、出店者との関係性が、理解と協力という形になったと感じる。また、今年度は、特に若いアーティストの活躍を地域の方に知ってもらい、活動を未来へと繋げる後押しもできた。例年とくらべ、親子連れも多い印象で、10代～20代の来場も多く、来場者数は多くはななくとも活気を感じられるものとなった。

総じて、スタッフも参加者も来場者も一体となって文化芸術を楽しめる空間・時間の創出ができた。

【課題】

・各地でイベントが重なっている時期、また、天気の影響等もあるが、情報として他会場でイベントが

あるというのを事前に踏まえ、集客をするための広報・販促の工夫が必要であった。(ワークショップであれば、チケットをオンライン予約できるようにする等にし、来場者の促進を図る等)。また、やはり、「知り合いが出るから見に来た」という人が多いため、未開拓の層を確保する難しさを引き続き感じた。そのため、地域団体や教育機関、関係部署と連携しPRを積極的に行っていくために、基盤となるような確かな道筋を持つておくことも情報周知のためには必要になる。また、親子でも来たいと思う(音楽や遊びやミニシアター)企画を増やしていくとともに、滞在時間を延ばす工夫の検討も必要である。

- ・多くの集客をすることで、より多くの地域住民に対して地域の「宝」にふれてもらい、そして、その魅力を広く伝えていく必要がある。併せて、「地域に埋もれている芸能にスポットを当てる」ため、絶えず、アプローチを行うとともに、「とりアート」が、郷土芸能・伝統芸能を鑑賞できる場であるという認識を広めることも必要である。

【その他事業に関する意見、感想など】

「とりアート」という愛称がついてからずいぶん経つが、まだまだ多くの人々に親しみを持たれるイベントにはなっていないと感じる。年に1度の大きな芸術祭という形ではなく、小さなとりアートコンサートなどを年2回ぐらい、駅やイオンで開催する等より知ってもらうためのプレイベントの開催も必要である。また、今回は、東部・中部の同日開催によって、来場者以外にも、とりアートへの参加の機会の可能性も狭める形となったため、イベント開催時期については世の中の流れを事前にリサーチをするなどの対応が必要。

【総括】

【成果】

<参加者>

- ・若年層の参加がかなり増えたことで、その友人、家族の来場者も増え、10代から40代の来場者が全体のほぼ半数を占めた。昨年は、60歳、70歳代の比率が高かったが、今年は各年齢層のバランスがほぼ均等となっている。初めて来場したという人も多く、とりアート事業を知ってもらうことができた。この方たちが是非リピータとなって、今後盛り上げていただきたい。
- ・親子連れが多い印象を受けた。若い世代の来場者も多く活気を感じられた。

<演目>

- ・郷土芸能・伝統芸能の参加も増えて演目の幅も広く、どれも素晴らしいパフォーマンスを見せていただいた。地域で守り、活動されている方たちを知ってもらう良い機会となった。
- ・若いアーティストの活躍や地域で活動する出演者やプロアーティストとの関わりは地域住民にとっても刺激になり明るい気持ちや前向きになれる素晴らしい機会となった。

<若年層の参加>

- ・小ホール公演では、中・高・大学生にとって大きな舞台出演の機会となり、また、プロの本格的な演奏に触れることで大きな刺激となったと思う。
- ・「若者たちを巻き込んでいく」ここ数年の取組み、いろんな試行錯誤やチャレンジが年々バージョンアップされている。今回はとりアートのホームページができ SNS を活用した情報発信も積極的に取り組み、アーカイブも残せる仕組みへと舵をきれたことは大きなステップアップ。
- ・数年前にとりアート東部のステージに出演した若者が成長してコラボ演奏する姿を嬉しく拝見した。また学生や社会人スタッフの活躍は、文化芸術に触れる機会提供だけではなく「育んでいく」「繋いでいくバトン」といった未来への人材育成の役割も果たしている。

<その他>

- ・キッチンカーが出店していたり、客席にテーブル席が出来たりと、ゆっくり楽しむ空間が出来ていた。

【課題】

<集客・イベント内容>

- ・来場者数は目標を上回ったが、アンケート回収率と顧客満足度は目標に届かなかった。
- ・とりアートは、身近なところで文化芸術に触れたり、体験出来たり、伝統芸能を知ることができるなど、素晴らしい事業だが、まだまだ浸透しておらず集客が難しい現状である。
- ・実施者のアンケートでも、観客の少なさを指摘された方が多くみられる。PR方法について、今回若年層が多かったにも拘らず、このイベントを知ったのは、ポスターやチラシ、知り合いが出演するからの口コミが多かった。費用はかかるが、先ず、来て、見て、体験してもらうために、テレビCMの利用も考えてはどうか。
- ・参加者のアンケートから、「いつも同じ参加者ばかりで、マンネリ化している感がある。新しい参加者があれば客層も変わる」という意見もある。知り合いが出るから来たという人を、今後どう引き留めていく

のか、難しいが検討する必要がある。

- ・来場者の滞在時間を増やすような工夫は引き続き必要と考える。
- ・子どもの年齢層に応じたファミリー層の細分化や、ターゲット層に合わせたコンテンツの造成・企画が必要。

<日程>

- ・鳥取市内各所でのイベント開催や、市内の学校の登校日と重なるなど、集客に大きく影響した。例年、この時期には集中するので、日程の見直し等検討してはどうか。

【その他事業に関する意見、感想など】

- ・オープニングイベントやエンディングイベントには、若者のグループ（出演者の多い）を配置して、盛り上げと集客につなげる工夫も必要。
- ・とりアートは、気軽に多様な文化芸術に触れることができる。知り合いが参加されていたり、いろいろな活動をされている人たちを知ることにより、自分も何かやってみたいと思う人もあるのではないか。「とりアート」そのものを知らない人も多いと思うので、駅前広場や北イオンなどで「とりアートプレイベント」と称してミニコンサートなど開催し、テレビニュースなどに取り上げてもらえると更にPR効果が期待できる。
- ・SNSを今後も継続しファン作り拡大に期待する。
- ・イベントホールでは、ミニチュア作家の中学生とお母さんがおられ、小学生の頃の家にあるもので作り始めた初期の作品から、ミニチュアクリエイターとなった最近の作品までの紹介や、いろいろな思いを伺うことができた。
- ・小ホールでの2人のプロアーティストのステージは、演奏はもちろんのこと、トークも素晴らしかったが、観客が少なくとても残念だった。

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標 (※1)	行動計画 (※2)	達成度(※3)及び 評価理由(※4)	達成度及び評価理由
「アート」 に親しむ ～環境づ くり～	誰もがア ートに親 しむこと ができる 機会の充 実と環境 整備	<p>県民参加型の文化祭及びアマチュア文化活動者の発表の場として、音楽・演劇・舞踊・美術・ものづくり・食など多様なアート・文化体験できる企画を揃え、子どもから大人まで幅広い年齢層が楽しめる催しとする。</p> <p>会場は、上演・鑑賞環境に優れた大・小ホールから、アクセスしやすいオープンスペース（アトリウム）まで、倉吉未来中心の特色を活かした会場設定とし、本格的な舞台公演から気軽に楽しむ企画まで、多様なニーズに応えることのできるプログラミングとする。</p> <p>併せて、「アマチュアバンドライブ」など、特にターゲット設定を明確にした企画を実施し、普段劇場・ホールへの来場が少ない層へアプローチを行う。</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>全体のメインターゲットを「子ども・ファミリー層」に設定し、企画もそれを全面に打ち出した内容とした。加えて、会場レイアウトにおいても大ホール・大ホールホワイエ公演を除きほぼ1階に集約させることで来場者が各エリアを回りやすいようにし、4年ぶりの食ブースと併せ、両日とも家族連れを中心に賑わいを見せた。</p> <p>また、今年度は大ホールでは委員会制作によるコラボコンサートを、小ホールでは若手劇団による親子向け演劇公演を計画し、フェスタ全体の核に位置付けた。これは、例年メイン会場としているアトリウムが工事のため使用エリアが狭くなることが発端であったが、結果として本格的な舞台公演を2本上演できたこと、そして、これまでの活動の集大成としてオリジナルの公演に取り組めたことは、委員会としても大きな成果となった。また、「こども広場ミニステージ」と名付けて開催したアトリウムの公募ステージにおいても、出演者に対しては「子どもに向けたもの」というテーマで縛る形にはなかったが、新しいことにチャレンジする団体が多く、見どころ溢れるものとなった。さらに、アマチュアバンドライブにおいてもチケットは完売し、地元在住プロアーティスト等の熱演も相まって活気溢れるものとなった。そして、最終的な来場者数も目標を上回る3,903人（目標3,000人）となり、成果を上げることができた。</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>全体のメインターゲットを「子ども・ファミリー層」に設定されたことが、企画も含め焦点が絞られ内容も充実した。</p> <p>結果的に幅広い年齢層が楽しめる催しとなり集客にも反映された。</p> <p>例年より親子連れ・家族連れが多く活気がある催しとなっていた。</p>
		<p>障がい者のアート活動支援として、例年舞台芸術に取り組む団体の出演がメインとなっているが、今年度は、あいサポート・アートセンターとの連携により、美術分野での参加も促進し、障がいの有無を問わない、ボーダーレスなイベ</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <p>障がい者のアート活動支援として、ミニステージに2団体の参加があり、加えて、展示企画としてあいサポート・アートセンターとの連携企画を実施した。いずれの企画も「障がい者アート」として特別扱</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <p>障がいの有無を問わずボーダーレスなイベントとして、アートを切り口に自由な感性による創作・表現の場作りの企画が実施できていた。</p> <p>また、会場に障がい者アートのフリーペーパー「Hugs」が</p>

		ントを目指す。	いするのではなく、他の出演者・企画と等しくすることで、ボーダーレスなイベントとすることができた。 【課題】 あいサポート・アートセンターの運営体制が変わったことをきっかけに、改めてこれまでの経緯や今年の連携策について意見交換する場を設けたが、お互いに様々なことが曖昧なまま進んでいたことが分かった。当たり前のことではあるが、外部団体との連携については、双方の立場や考えを事前に良く共有しておかなければならない。	持ち帰り自由で置いてあり、その存在を知ることができた。 【課題】 本番のとりアートに至るまでの運営体制及び内部の事情については、評価委員として知るすべはないが、企画を実施するまでの過程は当日の成功を導くためには大変重要なことである。事業実施者において、外部団体と連携していく際の様々な事についての共有を課題として提示されているのでここに挙げておく。
		広報施策として、例年情報の入手先として上位に来る「チラシ」を第一とし、例年の中部地区日本海新聞購読全世帯への折込配布に加え、子ども向けイベントにスポットを当てた個別チラシの園児・児童への配布など、ターゲットとした層へ情報が届くよう、チラシの配布方法を工夫する。 また、鳥取中央有線放送による事前告知番組の制作・放送や、委員管理による、とりアート中部オリジナル Facebook ページでの発信にも努め、オリジナルのPR動画なども作りつつ、情報発信を行う。	達成度：達成 【成果】 計画どおり「チラシ」による広報を第一とし、新聞折込や子ども達を対象とした配布等を計画的に展開した。結果、アンケート集計においても情報入手先の大部分を「チラシ」「折込」が占め、集客の大きな要因となった。併せて、「出演者からの口コミ」も上位となっており、出演者が積極的に広報に協力したことが伺える。一方、PR動画等を作成し情報の発信に努めた「WEB・SNS」については、アンケート結果上では前年とほぼ変わらなかった。今の時代「WEB・SNS」での情報発信はごく当たり前のことであるが、イベントの性質により、集客（＝来てもらう）のための広報と発信（＝知ってもらう）のための広報を使い分ける必要があると感じる。	達成度：概ね達成 【成果】 Web や SNS など時代に合わせた情報発信は当然であるが、団体の計画通り「チラシ」による広い範囲での配布が大きな成果を上げ、取り組み目標の達成に繋がった。また、「出演者による口コミ」も大きな力のひとつとなっていた。イベントに関わる子どもたちや大人が多ければ集客や観客動員に大きな影響があるといえる。 【課題】 広い範囲でのチラシ配布が集客に大きな効果があったと言えるのだが、出演団体名やイベントの横にでも簡単な開催日時の記載があれば良かった。コラボコンサートも大ホールでの開催で、企画自体はとても良かったが、集客が少なかった。有料無料の差は多少あるとしても、日時などの記載があれば「知っている人」や「関係者の口コミ」だけではない集客に繋がったように思う。 また、Facebook ページを検索したところ過去の情報しかヒットせず、どのページでの発信なのかが不明であった。
		【前年度の課題】 ・催しの性質を踏まえた広報策の実施。口コミ宣伝等をうまく広報手段の中に盛り込み、より多くの集客につなげる。 ・聴覚障がい者だけでなく他の障がい者への配慮、手話通訳者の立ち位置や出演者等と重ならない動線の確認、また踊りや詩吟など活字の方が分かりやすい演目については方法の検討も必要。		
「アート」が育む・「アート」を育む	子ども・青少年のアート鑑賞・体験・発表す	とりアート中部が長年取り組んで来た次世代育成の集大成として、大ホールを会場に、「中部少年少女	達成度：達成 【成果】 とりアート中部が長年取り組んできた次世代育成企画であ	達成度：達成 【成果】 とりアート中部として企画された次世代育成の集大成

<p>～人づくり～</p>	<p>る機会の充実</p>	<p>合唱団 MIRAI」と「中部ウインドアカデミー@サククス」によるオリジナルコラボレーションコンサートを制作・上演する。</p> <p>とりアート中部では、子どもたちが学校や年齢を越えて集い、専門家の指導を受けながら音楽に親しむ「中部少年少女合唱団 MIRAI」と「中部ウインドアカデミー@サククス」の2企画を継続実施してきたが、どちらも最後の成果発表は単独ステージで、共演機会はなかった。</p> <p>しかし、とりアートの現事業スタイルが今年度で一区切りとなるのを受け、初めて中部地区委員会プロデュースによるコラボコンサートを計画し、その集大成とする。</p> <p>併せて、県内の若手演劇活動者を中心に結成された「劇団星のふる町」による親子向け演劇公演を企画し、次代を担う活動者へ発表機会を提供するとともに、親子で演劇を鑑賞する機会を提供する。</p>	<p>る「中部少年少女合唱団 MIRAI」と「中部ウインドアカデミー@サククス」、そして友情出演となった「リトルバレリーナ」とのコラボコンサートでは、単独公演では味わうことができない「総合芸術」の要素を体験し、発表できる機会となった。それぞれの単独ステージは「音楽」がメインとなるが、今年はこちらに映像や舞踊が加わり、視覚的にもアプローチすることや、視覚的要素と音楽の調和で一つの舞台を作り上げるといった総合芸術に近い体験をすることができた。これは、普段の活動の中ではなかなか体験することができない希少な取り組みでもあり、子供達にとってはまたとない機会となった。また、音響・照明の専門業者を除き、演出・構成・舞台監督を委員及び指導者が担ったことも大きな成果で、子ども達にとっても、委員会にとっても集大成的な公演となった。併せて、小ホールで公演した若手劇団「劇団星のふる町」も、セミナールームでの公演からステップアップしたホール公演であり、これからの地域文化を担う若手の演劇活動者たちに貴重な機会を提供することができた。</p>	<p>としての、大ホールにおけるコラボコンサート・小ホールでの若手劇団「劇団 星ふる町」は単独公演では演者・観客共に味わうことのできないステージとなったといえる。総合芸術としての企画は、参加する演者にとっては貴重な経験であり、観客にとっても満足でき共に次に繋がる機会であったと評価できる。</p> <p>コラボ企画に参加した子ども達にとっても、異なる団体の空気感や取り組む姿勢や技術を互いに知ることは貴重な経験であると言える。</p>
		<p>とりアート中部は長年次世代育成をテーマに掲げ、ファミリー層をメインターゲットとしてきたが、今年度はより強く方向性を打ち出した企画ラインナップとする。アトリウムを始めとしたオープンスペースでのイベントは「こども広場」と銘打ち、親子で楽しめるワークショップやミニステージを充実させる。さらには、中部地区内の園児・児童から作品を募った「未来をえがこう！絵画コンクール」や中学校美術部員による「ステップアート」も継続実施し、様々な入口からアートに触れる機会を提供する。</p> <p>また、スタッフにおいても高校生～大学生の参加を募り、企画参加のみならず、運営面においても青少年の参加を促進する。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 例年「次世代育成」をテーマに掲げてきたが、今年度はターゲットと方向性を「子ども・ファミリー層」とより強く打ち出しプログラミングした。これは、子ども達が楽しめるものにすれば必然的に大人の来場も増えるという考えから至ったものであったが、結果、昨年より 20 歳未満～50 代までの来場割合が軒並み増え、方向性が間違っていないことが、及びターゲットを明確にすることが観客動員につながることを証明となった。併せて、長年取り組んできた「未来をえがこう！絵画コンクール」についても、連続入賞や表現の工夫が見られる作品が増えるなど、長年継続してきた成果を実感している。また、ステージ出演、ワークショップ出展、運営スタッフにおいても子どもから学生まで多くの若者が参画し、例年以上に活気あふれる催しとなった。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 イベントはその企画の内容・方向性や趣旨、ターゲットがはっきりする事が大切である。服と同じでフリーサイズはなかなかしっくりこない。魅力も半減する。今回、「子ども・ファミリー層」をメインターゲットにして企画したことで、魅力的な内容となり観客動員や満足度の高さに結びついたと言える。</p> <p>また、長年開催されている「未来をえがこう！絵画コンクール」も継続して行うことの成果を見ることができた。</p>

	【前年度の課題】 なし		
「アート」で元気に～地域づくり～	住民が地域の宝に触れたり、良さを認識したりする機会の創出	ワークショップにおいて、とっとりのわらべ歌や因州和紙、勾玉など、地域の素材や文化に触れる企画を実施し、地域の良さを体感する機会を提供する。また、地域の活動者によるパフォーマンス等を見聞きすることで地域文化を見つめ、改めて地域の良さを感じる機会を提供する。	達成度：達成 【成果】 因州和紙を素材としたものどっとりのわらべうた、勾玉作りなど、地域色を打ち出したワークショップを招聘し、特に子ども達に例年とは趣が異なる体験機会を提供することができた。また、鳥取短期大学学生によるワークショップやミニステージ出演者によるワークショップも盛り込み、地域の多様な文化活動を紹介することにつなげた。
			達成度：達成 【成果】 住民が地域の宝に触れたり、良さを認識したりする機会の創出ということで、革を使ったキーホルダーづくり、因州和紙を使った貼り絵、カラフルな勾玉づくりなど、地域性を生かしたコーナーは、多様な価値観を体感し地域を改めて知る場ともなっていた。学生たちによるワークショップやミニステージも提供する学生たちにとっても貴重な機会になった。
	【前年度の課題】 なし		
達成度集計(※5)		(17/18) ≒94.4%	(16/18) ≒88.9%

【定量目標・実績】

	目標	実績	(参考) 昨年度実績
④ アンケート回収率 (%)	45%	47.1%	64.7%
⑤ 観客満足度 (%) (※6)	93%	82.2%	93.5%
⑥ 入場者数 (名) (※7)	のべ3,000人	のべ3,903人	のべ2,648人

【自己評価総括】

【成果】

- ・子どもが楽しめるということに特化した中部フェスタではあったが、結果的に多数の来場があり、子供たちの笑顔があふれ、例年以上に賑やかで楽しいものとなったと感じる。
- ・これまでのとりアート中部の集大成として、委員の手によって「中部少年少女合唱団 MIRAI」「中部ウインドアカデミー@サックス」「リトルバレリーナ」によるコラボ公演が開催できたことは、非常に大きな成果であった。大変なことも多かったが、舞台制作の裏側やそれぞれの分野のことを知ることができ、今後文化活動をしていく上で財産になったと思う。様々な分野から委員が集まった実行委員会形式だからこそ得られた貴重な経験である。

【課題】

- ・開催日程について、今回とりアート東部と中部が同じ日程になってしまい、お客様や出演者を奪い合うような形になり勿体なかった。また、秋の文化芸術シーズン、そして何より長く続いたコロナ禍から平常に戻ったということもあり、外部イベントにおいても日程が重なっているものがあった。来年度以降のとりアートでは地域連携が謳われているが、多くの参画を募るためにも、日程も含め、周辺のリサーチが必要である。
- ・コラボ公演においては、全体を俯瞰する演出ポジションの重要性を痛感した。このように、舞台制作の裏側を知る活動者は多くないので、今後の取組として、活動者に対して舞台制作の総合的な支援があると、より地域の文化活動が活性化していくのではないかと感じる。

【その他事業に関する意見、感想など】

- ・自分自身の体験として、とりアートが長年続いて来たことが人材育成につながると実感している。自分自身高校生ボランティアとして関わった時に初めてとりアートのことを知り、公募での参加を経て、結果、委員となった。立場が変わるにつれ責任や求められるものも変わっていったが、とりアートに携わったからこそ成長できたと感じている。人材育成を定量的に表すことは難しいが、実体験の声として伝えたい。
- ・来年以降の内容が未定ではあるが、良い取り組みも多かったと自負している。ぜひブラッシュアップして次のとりアートが実施されること、特に子ども達にとって様々な経験が出来る場となるよう、期待する。

【総括】

【成果】

メインターゲットを子ども・ファミリー層に絞ったことで、企画・内容の方向性が明確となり、中部フェスタとしては集客も含め充実していたと言える。コラボ企画に至っては出演者・観客共に充実し貴重な経験の場ともなっていた。

アトリウムが一部工事中であった為、ミニステージがフラットな舞台として設置されていたが、観客と演者が一体となり(特にフラのステージなど)熱量も伝わりやすく思わぬ効果だったと言える。

【課題】

18日(土)大ホールにおいて、とりアートの企画ではないコンサートが開催されていたが、違和感を感じた。館全体がとりアートの催し物である方が一体感があり盛り上がるように思う。

【その他事業に関する意見、感想など】

今後、美術館がオープンすることで中部エリアの注目度も上がり、長期的にアートや芸術がもっと身近になり、文化的な盛り上がりや人々の意識の変化も予想される。長期にわたり培ってきたとりアート中部の運営経験や人材育成などが次のステージに繋がっていくことを期待したい。

また、県内の芸術愛好者や団体にとって、日々積み重ねた練習の発表の場の一つとして、とりアート(ミニステージ・ホール発表)が位置づけられる事は、モチベーションアップにも繋がるように思う。

裏側(図書館側)からの入場者に向けて、大きめの案内ボード(見取り図)やワクワク感を感じさせる飾りつけなどの工夫があっても良いように思う。裏からの入場者にはマルシェの存在が把握しづらいように思う。

第 21 回鳥取県総合芸術文化祭とりアート 2023 西部地区事業

令和 6 年 1 月 7 日(日)・8 日(月・祝) 米子市児童文化センター

【文化芸術事業評価シート】

		自己評価		評価委員による評価
目的	取組目標 (※1)	行動計画 (※2)	達成度(※3)及び 評価理由(※4)	達成度及び評価理由
「アート」 に親しむ ～環境づ くり～	日頃、文化 芸術を鑑賞 していな い、活動をし ていない 人も文化芸術 を気軽に 楽しめる機 会の提供	<p>昨年に引き続き、親子が気軽に訪れている児童館を会場にすることでイベントの内容について理解を深め、昨年度課題であった、当日とりアートに関係なく訪れた方が、気軽に参加できるプログラム(対象：おはようライブ!、わらべうたガチャ、フォトモダチ・ワークショップ)の充実を図る。事前予約制のプログラムについても当日入場枠を用意するなど、日常生活で利用する施設で、アートに触れる機会を整備する。(前年度比で 1.5 倍)</p>	<p>達成度：達成 【成果】 事前予約に加え、当日券も設定したことで、とりアートを目的に来た方だけでなく、児童文化センター利用者にもとりアートを知ってもらい、参加してもらうことができた。 事前予約制プログラムでの当日券入場者数は、大人限定の「マイत्रीライブ」と、夕方上演の「ゆたかの星(1/7 公演)」を除けば、各公演の入場者数の約 40～60%を占めた。 また、来場者アンケートの参加理由では「偶然通りかかった」が約 1 割を占め、本来このイベントに関心がなかった層にも、気軽にアートに親しむ環境を提供できた。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 昨年度課題であった事前予約の是非について、当日偶然通りかかった方にも気軽に参加できる、昨年度の課題を踏まえた柔軟な対応ができていた。</p>
		<p>アートを実践するアーティストと気軽に関わる機会を提供し、アートを自分事と感じられるようなプログラムを用意する。ハブとなるプログラムは「わらべうたガチャ」を再演、参加アーティストにもゲスト的に入ってもらい、わらべうたあそびを通して、文化・芸術を身近に感じられる機会を創出する。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 「わらべうたガチャ」公演では、他プログラムのアーティストにも飛び入りで参加していただいたり、「フォトモダチ」展示・ワークショップでは、アーティストはほぼ会場に常駐しているような環境で、観客とアーティストが同じ空間で同じ時を過ごすことができ、アートと観客の関係を近づけることができた。 音楽、写真、絵画、演劇など異なるジャンルのアーティストが繋がる企画が工夫できた。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 アーティストと来場者の関係性のよさが、会場の雰囲気から感じられ、観客の垣根をなくし、よりアートを身近に感じることができていた。読み聞かせの時間になると、大きなアナウンスもなく自然な流れで向きを変え、移動し集中して聞いている様子が印象に残った。</p>
<p>【前年度の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ感染対策のためイベントの多くが事前予約制をとっていたため、参加を断らざるを得ないケースがあったので、当日参加を認めるなど柔軟な対応が必要。 ・ターゲットである「日頃文化芸術を鑑賞していない、活動をしていない人」がどのくらい参加していたか、アンケートからは分かりにくい。 				
「アート」 が育む・ 「アート」 を育む ～人づく り～	子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会の充実	<p>子どもたちが楽しむためには、大人たちが一緒になって楽しんでいる姿を見せることが大切である。プログラム内容を子どもに寄せる(子ども向けにする)のではなく、子どももでき、大人も楽しめるものとし、結果、幅広い世代へと届くプログラムを提供する。プラネタリウム企画としては、新作朗読劇では、幅</p>	<p>達成度：達成 【成果】 子供、大人問わず、観客もアーティストも、ふらっと立ち寄った方も、良い意味でごちゃ混ぜで垣根なく楽しめるイベントを開催できた。 プラネタリウム企画では、星空を眺めながら、音楽と朗読劇を楽しむ贅沢な時間を、大人も子どもも過ごすことができた。 展示企画では、作家の制作過程を見聞きするギャラリート</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 アーティストの力量の高さと、アーティスト間の連携が全体の雰囲気を盛り上げており、ふらっと立ち寄った方も年代に関係なく楽しめた。 この施設の特徴であるプラネタリウムを生かした、朗読劇やコンサートが企画され、参加者は豊かな時間を過ごすことができた。</p>

	<p>広い世代の鑑賞者の琴線に触れる作品の創作に取り組むことで、芝居の魅力を感じられる企画を目指す。</p> <p>展示企画においては、作家と直接コミュニケーションを取れる環境での作品展示や関連ワークショップを実施することで、より一層作品への興味関心を高める。また、作品制作にあたっての事前リサーチ過程を撮影した動画を会場で公開し、普段は知る機会のない作家の創作過程を垣間見ること、参加者とアーティストの相互理解を深めることを狙う。</p> <p>多目的ホール企画では、観客も一緒に身体を動かしたり、様々なアーティストによる多彩なコラボレーションに触れることのできる内容とする。</p> <p>オープニングから始まり、ワークショップ、クロージングまで、自分にはなかった感性を体感するためのきっかけをつくり気づきを得られる体験的要素を盛り込んだ企画とする。</p>	<p>ークも実施し、作家とのコミュニケーションも含め、作品に興味を持ってもらうことができた。題材が身近な場所、ものであったり、懐かしさを感じる要素のある作品を展示できたことで、大人も子どもも惹きつける内容となった。</p> <p>2日目のワークショップは、作家の作品に参加者の作品が少しずつ加わることで、ステージいっぱい出来上がったフォトモは素晴らしいアート作品となった。大都市等での先進的なワークショップとしても通用する、レベルの高い内容を実施できたと感じる。</p> <p>多目的ホール企画では、2日間参加していただいた音楽、写真、絵画、演劇など異なるジャンルのアーティストと観客とのオムニバスステージを開催した。平土間の会場で、ステージと客席とを分けることなく、会場一体となってアートの楽しさを体験できる場となった。</p> <p>全プログラムを通して、参加アーティストの協力により、鑑賞のみに留まらず、参加者とのふれあい、体験の機会が含まれて、参加者へのアートへの関心を深める内容を展開できた。</p>	<p>ワークショップでアート作品を作り、アーティストの作品に加えてそれを家族で鑑賞する、という場の雰囲気が素晴らしかった。</p> <p>【課題】</p> <p>すべてのプログラムが万人受けとはいえずオリジナル創作朗読劇は内容は素晴らしかったが、子供達には少し難しく完全に大人向けのプログラムとなっていた。</p>
	<p>事前予約制を取らないプログラムは、座席を設けず、平土間空間においてできるだけ鑑賞者が自由な姿勢で体感できるような鑑賞空間を用意する。アーティストと間近に接することのできる距離での鑑賞も可能とし、普段のこどもの行動をベースに、気構えることなく参加できるよう配慮することで、アートはかしこまって体験するものではないことを表す。</p> <p>当日参加枠の設定については、前述のとおり。</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>オープニングライブ及びクロージングライブを中心に、気軽にそしてアートを身近に感じるプログラムを提供することができ、盛況であった。</p> <p>会場で使用した多目的ホールは、カーペット敷きの仕様であり、リラックスして楽しめる内容を提供できた。また、当日券枠を設け、予定なく訪れた方も入っていただけるよう工夫したことで、中には参加したプログラムの後、急遽次のプログラムも申し込むなど、会場に長く滞在する鑑賞者の姿も見えた。気兼ねなく参加できる雰囲気の中で、アートは身近なものと感じていただけたのでは、と感じる。</p> <p>ワークショップでは、アーティストと一緒に制作を楽しみ、巨大なアート作品に参加者も入り込んでいける内容で、アートを身近に感じる体験を提供できた。</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <p>昨年課題として挙がっていた昼食時間をはさむプログラムは解消されていた。また、事前予約制を取らないプログラムをたくさん設けたことで、参加者が気軽に体験できる場を提供することが出来た。</p> <p>クロージングステージではアーティストと観客との一体感を強く感じた。アートを気軽に身近に感じる事ができた。</p>
<p>【前年度の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験から鑑賞の流れによってアートをより楽しんでもらうという企画の意図の周知。 ・より幅広い年齢層に興味を持ってもらう工夫、当日参加枠の準備が必要。 			

		・親子がそろって楽しめるよう、プログラムの時間帯にも配慮が必要。		
「アート」 で元気に ～地域づ くり～	地域におけ る文化芸術 に活性化	<p>県外で活躍するアーティストに加え、地元のアーティストと共にプログラムを創り上げることで、地域文化の活性化を促す。今回は、西部地区イベントに縁あるアーティストの再演と会場によって、過去参加した観客にリサーチする。(アンケートにより、来訪回数を確認する)</p>	<p>達成度：達成 【成果】 準備段階から、地元と県外のアーティストも交え、リモートでの打合せや、現地に招いての事前リサーチを重ねた。その結果、各アーティストがイベントの意図について理解を深め、共演者同士が柔軟に対応いただいたことで、当初の予想を超える化学反応が起こり、大変貴重なプログラムを実施することができた。 アンケート記述での、「コラボが重なり、全てが即興の아트ライブで、癒し・刺激になった」、「住んでいる町が芸術になっていて楽しかった」、「観客も一緒に楽しめるひとときだった」、などの意見から、来場者にもアーティスト自身が楽しみながらパフォーマンスや創作をしている雰囲気が伝わり、その結果、アートに対してのイメージをより身近に感じるものにできたと言える。 また、委員メンバー自身も、先進的な情報や価値観が溢れる都市部からのアーティストと、地元のアーティストのコラボレーションをコーディネートすることで、アート活動に関わる方策や経験を積むことができた。</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 出演者の力量の高さがイベントの質に反映されていた。アーティスト同志の素晴らしい融合により、貴重でユニークなプログラムが多数生み出されており、観客にレベルの高いアート体験を提供できていた。 またアーティストは長時間滞在し、気軽に参加者とコミュニケーションが取れていた。 【課題】 ここ何年も同じような出演者であるということは、主催側にとって安定した内容を提供できるというメリットがある。しかし、一方では地元で芸術に携わる人々の活性化や幅を広げるという視点では、疑問である。</p>
		<p>アート活動の場の拡大と、子育て世代という、公共ホール等で企画される文化芸術に触れる機会が少なかった層へとアプローチを目指したイベントとする。アート活動＝公共ホールや催事会場で開催するものという既成概念による施設選択から脱却し、アートを通して日常的に地域住民が集う文化施設を積極的に活用する。(アンケートにおいて、来場のきっかけを確認する) また、米子市周辺の小学校・保育園・幼稚園等へのチラシ全校配布も実施し、イベントの周知を図る他、SNSを積極的に活用した情報発信を実施することで、米子市以外からの来場者数増加を目指す。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 児童文化センターで行うことで、こどもを中心としてその親・兄弟・祖父母など、多世代にアプローチでき、気軽に参加することができたと思う。 米子市周辺の小学校・保育園等へ全校チラシを配布し、イベントの周知を図った。また、動画配信なども行い、今までの観客だけでなくそれぞれのアーティストのファン層にもPRし、米子市外からの来場者が増加した。 チラシに「フォトモ」を掲載することで、参加する前から期待感を促し、大人もこどもも楽しめるワークショップとなった。</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 児童文化センターというこども達が身近に通える場所でのイベントは、米子市周辺のこども達にとって「いつものまちで文化する」に沿った形のイベントとなった。堅苦しくなく、親子連れでも入りやすい施設であり、ここを会場にしたのは良い選択だと思う。 特に、プラネタリウムという特別な場所でのパフォーマンスは、来場者各々に特別な深い印象を残したと思う。 【課題】 昨年比で 45%増の来場者は素晴らしい。米子市以外からの来場者についても、増加してはいるが、広報の方法の工夫によって、いっそう増加が見込めたかもしれない。 また、イベント会場の収容人員の少なさ、又駐車場スペースの狭さ等、近隣の地域からの集客の難しさは否めない。</p>

			さらに、開催時期が冬季だったということ、しかも1月初めだったというはどうだったのだろうか。寒さ、雪などに大きく左右されかねないリスクがあったように思う。特に、市外からの来場者にとって、天候は大きな要素になるのではないだろうか。
【前年度の課題】 <ul style="list-style-type: none"> ・開催時期の検討（他の文化イベントや学校行事と重なる時期であった） ・出演者や内容の多様化を図る。 ・アンケートの質問内容を検討するなどして、事業効果の検証が必要。 ・広く周知できる方法を模索し、米子市以外の周辺地域からの来場者を増やす工夫、幅広い層に向けた企画の充実が必要。 			
達成度集計(※5)		(18 / 18) ÷ 100%	(15 / 18) ÷ 83.3%

【定量目標・実績】

	目標	実績	(参考) 昨年度実績
⑦ アンケート回収率 (%)	60%	45.6%	61.3%
⑧ 観客満足度 (%) (※6)	90%	92.4%	96.8%
⑨ 入場者数 (名) (※7)	800人	1,095人	460人

【自己評価総括】

【成果】

多くの親子連れの参加やプログラムの工夫もあり、アーティストと一緒に参加することで、アートを身近なものに感じてもらうことができた。

幅広い層の世代の参加が見られ、こども向け施設での実施でありながら、大人もこどもと一緒に楽しんでいる姿が見られたのは大きな成果であり、今年度のとりアートは今までのとりアートの中で最も西部地区のテーマ「いつものまちで文化する」に沿った形になったと思う。

また、県内外で活躍するアーティストの制作過程・本番までの過程に接することができたことは、アートイベントを企画する者にとっても勉強になるものであり、貴重な経験となる意義のあるものであった。

西部地区は拠点となる公共施設がない中で、公共団体と事務局を通して企画段階から交渉を重ね、使用や企画内容の理解を得ている。それらは、もちろん調整案件もあり様々な苦労があるが、実施までの過程で、地域住民の普段の文化芸術への接し方を知り、地方でのアートイベントの在り方について体感し、経験の蓄積、考えるきっかけに繋がる、とても意義のあることである。このような経験の蓄積が文化芸術に触れる機会が少なかった層へのアプローチに、細かな部分で反映されていったと思う。

【課題】

広報計画が疎かになった。期待していた参加数には達しているが、実施した会場が持つ集客力に支えられた事が大きく（そこが狙いではあるが）、広報を充実させ、会場施設とは縁のない人々へもリーチ出来れば良かった。

また SNS を効果的に活用し、イベントの準備段階や事前リサーチの様子など、開催までの過程を発信し、本イベントへの理解・関心に繋がれば理想的であったと感じる。

今年度は地区事業の集大成として、西部地区イベントが掲げる「いつものまちで文化する」というコンセプトのもと、来場者とアーティストの垣根を超え、一緒にアートを楽しめる場を創り上げることができた。

地区事業は今年度で終了となるが、今後の取り組みへと引き継ぐ課題としてあげるのであれば、今回のようなライブ感を活かしたプログラムを一度きりとせず、継続して企画し、次世代の子どもたちの感性を育む機会を繋いでいくことが必要である。

加えて、前述のように参加者・アーティストが交わり一緒にアートを楽しむといった、現代の感覚に近いアートイベントをするためには、委員をはじめ関係者の人材育成、経験の蓄積が不可欠。

また、これまでの地区事業を通じた波及効果について検証し、今後の取り組みに反映していくことも重要である。

【その他事業に関する意見、感想など】

とりアート西部地区イベント（県内各地区事業）はこれにて終了となるが、西部地区は約10年間、西部地区全体（花回廊・日野町（公共施設、保育園、介護施設）・境港市（史料館、漁港）・米子市（文化ホール・美術館・水鳥公園・児童文化センター）など）での実施を試み、アウトリーチ的にアートを届けていくこと

を継続し、今回はその集大成としての成果を感じることが出来た。

場所を変え模索する中で「いつものまちで文化する」を事業コンセプトに据え、いつものまちを委員会都合の「ここ」と決めて「待つ」のではなく、「届けていく」スタイルを継続することによって、参加する機会が少なかった人々への拡大をしてきたと思う。

また、『観る』だけではなく、『体験・自覚』することを重要視したプログラムづくりは、参加アーティストの柔軟な対応力、またそれを裏付けるスキルの高さ（活動理念・思想なども含む）によって支えられ、リピーターが増えてきていたのではないかと感じる。なお、アーティストにただ任せるのではなく、委員会メンバーそれぞれの協力（実働）とコミュニケーションによって積み上げてきたこともあってのことで、回を重ね委員同士の良い連携が生まれていたと思う。（構成メンバーの人数が少数でありつつ、“良いものを一緒につくる”という個々の意識が高かったため（良い点）、各個人への負担が大きくなったことも課題点である。）

県内外で活躍するアーティストの参加とその方々を基軸としたプログラムづくりは、地域にあるアートリソースの活用であり、それを拡大（認知・周知）することで、一般人へのアートへの関心を高めることに寄与するものと考えたためである。

一方、地区事業の主事業の一片でもあった公募事業（一般参加枠）については、コロナ感染拡大期から凍結したことは課題として残っている。コロナ期前より徐々にシフトチェンジを試みていたが、その理由は「とりアート（西部地区）」の方向性の明確化（存在理由の疑問）が大きな課題として繰り返されてきたことへの応答として、とりアートは、定着化されつつあった活動者の発表の場を重視するのではなく、それを見に来る鑑賞者（参加者）の拡大と育成が最優先事項であると考え、そのためには『観る』だけでなく『体験と自覚』を参加者に促すプログラムが必要であるとの考えから進めてきた。鑑賞者の育成が将来的には、鑑賞の質の向上と、鑑賞者自らが活動へと参加していくことを期待し、結果、多種多様な活動者がとりアートの舞台を利用して発表するようになることを目標としていた（地域の文化レベル（質）の向上にも寄与）。いわゆる、道半ばである。

なお、シフトチェンジを考えず、一般参加枠団体・者をまとめて、事業コンセプトに沿ったイベントのマネジメントが出来なかったのは、継続して担ったアートマネージャーの力不足に起因することが大きな要因であったことは自覚している。強いて記述すれば、素人（未経験者）をアートマネージャーに据えるためには、地域アートイベントをマネジメントできるだけのスキルを担わせるための教育的支援が必要であることも感じており、今後の課題ではないかと思う。

最後に、西部地区イベントとして、一定の成果を感じ充実した本イベントであったと思う。

【委員評価総括】

【成果】

<イベント内容>

- ・「いつものまちで文化する」のテーマに沿って、これまでの集大成といっても過言ではない程、大変魅力的なプログラムが目白押しのイベントとなった。
- ・過去、何度も使われた子供向けの施設で、それまでの問題点を洗い出し、改良を加え、幅広い年代にアピールできる内容も入れ込み、訪れた鑑賞者達に大きな満足感を与える結果となった。
- ・施設特有のプラネタリウム内で展開された数々のライブでは、そこに居るだけで非日常的な雰囲気を感じ、心地良い音楽・音・言葉、それに加えてたくさんの星にまつわるエピソードも識る事ができ、又、アーティスト自身が楽しんで演じている事が全体の“楽しさ”へ広がっていた。初めてのコラボレーション“フォトモダチ”の企画もスペシャルな広がりだった。
- ・アーティストと参加者のコミュニケーションの豊かさと、参加者の熱い思いを特に深く感じる事ができた。

<会場>

- ・来場しやすい会場を選択することはイベントにとって重要な点であるが、その点で児童文化センターは適している。ここを会場にすると、野外も使えるようなダイナミックなイベントに発展しそうな可能性がある内容であった。

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標 (※1)	行動計画 (※2)	達成度(※3)及び 評価理由(※4)	達成度及び評価理由
「アート」 に親しむ ～環境づくり～	・誰もが文化 芸術に親し むことができ るようにする ための環境 づくり	・開催日時について、同日 に隣接会場で開催される集 客イベント(農と食のフェス タ in 西部)と同時開催する ことで、他のイベント参加者 の会場への流入など、より 多くの方に文化イベント鑑 賞のきっかけとしてもらう。	達成度：達成 【成果】 入場者数は、のべ750人と目標 値(500人)を上回った。来場 者アンケートによる来場のき っかけは、「内容に興味があっ た」「広告物を見て興味を持っ た」が主であり、「偶然通りか かった」をあげた人は4人と少 数であったが、フェスタ同時開 催の相乗効果で郷土芸能に興 味のある方の誘引に一定程度 繋がったと考えられる。	達成度：達成 【成果】 ・目標を上回る集客を行う ことができ、多くの方に郷土 芸能のすばらしさを伝えた。 ・フェスタの相乗効果もあ ることが予想されるものの、 立ち見が出るほどの盛況ぶ りだった。
		・広く県民への周知を図る ため、様々な媒体を活用し、 効果的な広報に努める。 ※チラシ・ポスター、新聞折 込チラシ、新聞記事、ホーム ページ、SNS、ラジオ CM等	達成度：概ね達成 【成果】 以下の様々な媒体により周知 を行った。(共催者の鳥取県文 化振興財団による広報含む) ・チラシ・ポスターの配布(文 化施設、公民館、老人クラブ、 伝統芸能関連校、等) ・日本海新聞へ開催案内等の 記事掲載(8～10月に計5回) ・開催地域の日本海新聞購読 者(55,940世帯)へ新聞折込に よるチラシ配布(10/14) ・報道機関への資料提供 ・とりネットHP掲載 ・文化政策課公式ツイッター、 フェイスブックでの情報発信 【課題】 来場者アンケートによる催事 を知った媒体は、「ポスター、 チラシ等」「新聞、新聞折込チ ラシ」が多くを占めており、主 な読者である高齢者層に対 しては効果的に発信できたと思 われるが、30代以下の来場者 割合(2.9%)からすると、若い 層への効果的な発信は不十分 であった。	達成度：概ね達成 【成果】 ・紙媒体による広報が高齡 者層には効果的であること が改めて確認されたので、来 年度以降も今回と同じよう に様々な場面での広報は必 要である。 ・当日までに本事業のチラ シを目にする機会が多々あ ったことから、広報は一定の 評価ができる。 【課題】 ・若い世代に情報発信を行 うことは、これまでやってき た広報活動とは異なるやり 方をしなければならない。た だし、家族単位で来場された 方も多く見受けられたので、 若い世代ではなく、家族で楽 しめる内容であることを伝 えることが大事ではないか と思う。 ・高齢者にとって、紙媒体の どの種類が効果的だったの だろうか。周知は大切だが、 費用対効果も考えてみる必 要があるのでは。 アンケート結果から見ると、 30代40代50代を含めても、 12.4%であり、60代の16.8% に及ばない。決して若い層に 限らないのではないかと思 われる。 実際会場では、50代以下と 思われる方もずいぶんおられ たと思われる。来場者の動向 の把握の仕方の検討が必要 ではないだろうか。 若い人にこだわるのであれば、 広報対象を絞るなど検討 が必要ではないだろうか。

	<p>【前年度の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来場者の年代は60代以上が約7割と幅広い世代に関心を持ってもらう工夫がさらに必要。 ・児童、青少年の育成も大切だが、成年層、中高年層の育成が必要。 ・広報は、当日本番だけの観客動員数ではなく、より広く伝統芸能を知ってもらうことを目的に行うべき。動画での広報があればよかった。 			
<p>「アート」が育む・「アート」を育む～人づくり～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・出演団体の選定にあたり、構成メンバーに児童生徒・若者が多い団体も含めバランス良く選定し、各地域における活動のモチベーションとしてもらう。 	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】 打吹童子ばやしは、児童生徒で構成され、霞音楽会及びびがいなCONは児童生徒・若者が多いメンバー構成であり、全出演者118人中半分近くの54人が18歳以下での出演となった。出演者アンケートでも、児童生徒からは「たくさんの人に見てもらい拍手がもらえうれしかった」「いろいろな経験ができてうれしかった」などの感想があり、また大人からも「他の団体とコミュニケーションがとれた」「ますます練習を頑張りたい」などの感想があり、今後の活動にあたりモチベーション向上にも繋がること期待できるものとなった。</p>	<p>達成度：達成</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ご年配の方から若い世代まで出演されており、日頃の成果を披露する良いステージであった。やはり日頃の成果を披露する場が目標となることで、練習時におけるモチベーションの向上にもつながっていた。 ・18歳以下の出演者が多かったのは、会場全体に活気やなごやかさをもたらした。モチベーションアップにもつながったこともよかった。 ・若い世代の団体が多く出演されていたことから、意図は十分に感じられた。特に幼稚園の児童がステージに登場した際は客席から歓声が上がった。どの団体もJ-POPの曲をプログラムに取り入れていた印象があり、若い出演者と来場者のどちらにとっても興味関心を持てるよう工夫がなされていた。また、若い団体だけでなく、石見神楽波子社中が特別出演され、大蛇の演目を米子で鑑賞できたことは、大きな実績と捉えて良いと感じられた。
	<p>【前年度の課題】 なし</p>			
<p>「アート」で元気に～地域づくり～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統行事・伝統芸能の継承 ・住民が、地域の「宝」に触れたり、良さを認識したりする機会の創出 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人の公演を、次世代を担う子ども達が鑑賞・同じ舞台上に立つ経験を通じて、伝統を継承することを学ぶ機会とする。 ※出演者にもアンケートを行い把握する。 ・演技終了後の出演団体へのインタビューの際に、使用する道具や和楽器を深掘りする質問を盛り込むなど、会場の方にもより郷土芸能を身近に感じてもらうような演出を行う。 ※当日の観客アンケートにより把握する。 	<p>達成度：一部達成</p> <p>【成果】 出演者アンケートによる出演して良かったこととして、10代以下から「出演してみんなのいい刺激になった」「山陰の様々な郷土芸能を知ることができた」などがあり、子どもたちが地域の担い手の一員として成長できる場を提供できた。また、鑑賞者との距離を縮めるため、司会者と調整し、出演団体へのインタビューの際、演技で使用した太鼓を鳴らし、音の違いを体感してもらうことも行った。</p> <p>【課題】 司会から手拍子、手踊りを促したり、フィナーレでは出演者全員が太鼓にあわせて共演し盛り上げたが、そのほかに鑑賞者も一緒に参加できる演出を取り入れるまでは至らなかった。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域における伝統の継承が、年配の方から若い世代へと受け継がれている大切さを発表する良い機会となっていた。また、司会者がそれぞれの団体の良さや、アピールすべきポイントを上手く伝えていた。 ・太鼓など各団体の使用楽器に関する質問や音色聴き比べは楽しめた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷土芸能をもっと身近に感じるために、出演前後どちらかで、事前に撮影した映像を使うなど、以前取り入れた方法はどうか。（前年度の課題にも、挙がっている。） ・必ずしも来場者が一緒に参加できるような演出を入

			れる必要はないと思うが、最後に全団体が同じステージに立った際、客席まで出てくる演出があっても良いと思われた。
	まつり終了後に、録画映像をYouTubeで配信し、会場で観覧できなかった方に広く視聴いただき、鳥取県各地域の郷土芸能を多くの方々にも知ってもらい興味を持っていただく。	達成度：達成 【成果】 11月下旬から録画映像を文化政策課の公式YouTubeで配信し、いつでも鳥取の郷土芸能を映像で鑑賞できる機会を提供する予定。当日のパンフレットにもQRコードを掲載し、案内した。	達成度：概ね達成 【成果】 ・当日だけの発表にとどまらず、動画サイトで鑑賞できる選択肢を設けた。 【課題】 ・地域の芸能活動をもっと知ってもらえるならば、これまでの「まつり」「郷土芸能」をお知らせする動画のページも合わせて、当日のパンフレットで紹介してほしい。そうすれば、待ち時間の時などに、開いてみる方もいるのではないだろうか。 ・配信することだけでなく、視聴数につなげるまでが本取り組みであると思われるので、その工夫ももう少し欲しい。
【前年度の課題】			
<ul style="list-style-type: none"> ・より良い舞台発表にするため、スムーズな団体の入れ替わり、紹介動画を流すタイミングなどの観客を飽きさせない演出や、地域に伝わる伝統芸能の素晴らしさを伝える工夫が必要。 ・コロナ禍のため、他団体との交流機会の場がなかった。 ・出演団体の選定にあたって、選定委員会で選定した団体の中だけでは辞退される場合もあり、選定に苦慮している。出演団体を増やすことは、来場者数を増やすことにもつながるので検討が必要。 			
達成度集計(※5)		(12/15) ≒ 80%	(12/15) ≒ 80%

【定量目標・実績】

	目標	実績	(参考) 昨年度実績
⑩ アンケート回収率 (%)	70%	49.4%	69.6%
⑪ 観客満足度 (%) (※6)	90%	90.2%	87.8%
⑫ 入場者数 (名) (※7)	500人	750人	270人

【自己評価総括】

【成果】

今年度は、鳥取県文化振興財団との共催事業として実施し、同財団がこれまで実施してきた鳥取県青少年郷土芸能の祭典との合同事業として、児童生徒・若者が多く在籍する団体にも多く出演していただいた。出演者アンケートにおいても、10代以下の出演者から、大舞台での発表がよい経験になった旨の感想が多く、また来場者アンケートにおいても、「子どもの演技に感動し元気がもたらえた」「若い人が多く未来が明るくなった」などの感想が多く、郷土芸能の継承や地域の活力の維持発展に繋がる機会の提供ができたものとする。

また、来場者実績がのべ750人と近年の実績では最も多くなった。(R4:270人、R3:357人、R2:無観客、R元:585人) コロナ5類移行後の開催、第9回(H30年度)ととり伝統芸能まつり以来の県外団体の招聘などの要因もあると思われるが、来場者アンケートで観客満足度が90%を超え、全ての演技がよかったとの感想も多く、また出演者からも満員の会場から拍手がもらえて今後のモチベーションに繋がったとの感想も見られるなど、見る側、見られる側双方にとって満足度の高いものになったと考える。

【課題】

多くの来場があったが、60代以上の割合が8割を超えるなど、前年度よりもさらに高齢者層に偏った年齢構成となった。(※前年度(R4)の60代以上の割合:7割弱)例年このイベントを楽しみにしておられる高齢者層の方も多くおられ、当然多くの高齢者にもきていただきたいが、親子で鑑賞してもらうなど、40代以下の若い方の来場者の割合をもう少し増やすことが必要だと感じた。

また、ホール内に収容できないほどの来場があったが、事前の想定・準備が不十分であり、円滑な誘導や座席の有効活用が一部できない部分が見られたなど、運営面での課題があった。

【その他事業に関する意見、感想など】

来年度以降は鳥取県文化振興財団の文化事業として実施する予定であり、県で洗い出した今年度の成果や課題については、同財団と共有して活かしてもらおう。

【総括】

【成果】

・鳥取県内の各地域から、幅広い世代の方々に出演していただくことで、地域に伝わる郷土芸能の素晴らしさや、郷土芸能がもたらす人とのつながりの大切さなど、郷土芸能を継承し、守っていくことの必要性が伝わる素晴らしい公演であった。また、鳥取の郷土芸能にとどまらず、石見神楽の方をゲストに招いたことで、山陰に伝わる郷土芸能の奥深さや魅力を聴衆に届けることができた。加えて、司会者はとても上手くそれぞれの団体の魅力や、継承していく上での苦労話なども含め、その魅力を余すところなく引き出していた。さらに、同日開催の農と食のフェスタを目当てに来た来場者も多いと予測していたが、本事業の内容に興味を持って足を運んだ来場者が大半だったことは、本事業の大きな成果である。

【課題】

・観客の動員数は目標を上回っていたが、会場係の人数が全く足りておらず、開場時、休憩時のアナウンスの仕方を含めて、空いている席を全て使用する努力を怠っていたように思われ、立ち見を余儀なくされる方や客席に座れない方への対応には大きな課題が残った。舞台誘導を含めて事業であることを意識してもらいたい。

・同時開催のフェスタと同じ駐車場であったため、満車状態で早めに来てでも停めることができなかった。また来場者の誘導が開演直後まで終わらず、開演が遅れた。

・アンケート結果の分析において、それぞれの設問の分析に年代別を取り入れたらどうだろうか。例えば、「問3何でお知りになりましたか？」の回答で、一番多い「新聞、折込チラシ」において、60代や30代以下の回答はどのくらいなのかを見ると、広報の仕方の見直しなどのヒントになると思われる。

・アンケート回収率が昨年度より20%減少しており、その要因分析は必要であると思われる。

・出演者の関係者を除いた若い世代の来場者を増やす工夫が必要である。

・盛況だったがゆえに開演直後まで入場者の誘導がなされ、開演が少し遅れたことは来年度に向けた課題といえる。

【その他事業に関する意見、感想など】

・鳥取県の人口が毎年減少する中で、地域の郷土芸能の保存、継承は毎年難しくなることが考えられる。この事業の特色は、地域における郷土芸能を発表する場を設けるだけでなく、郷土芸能が地域にもたらす世代を超えた人々の交流や、地域で活躍する若い人材を育成するなど、郷土芸能が地域に与える良い効果を広く紹介していることである。主催者が代わっても、この事業の素晴らしさや魅力を継承していただきたい。

・J-POPのプログラムは各団体につき1曲で良いようにも感じられた（若干多い印象を受けた）。

・ヤマタノオロチは県外の団体であり、郷土芸能という観点では、同じプログラムに入れるのではなく「特別ゲスト」として紹介した方がよかった。

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標 (※1)	行動計画 (※2)	達成度(※3)及び 評価理由(※4)	達成度及び評価理由
「アート」 に親しむ ～環境づ くり～	だれもがア ートに親しむ ことのできる 機会の充実 と環境整備	<p>県展への来場が少ない 30 代以下の若者に対し、県展の存在を認知してもらい、作品の創作発表やアート鑑賞への関心を持ってもらうことを目的として、Instagram、Twitter などの SNS 上での広告を行い、出品や展覧会への来場を呼び掛ける。</p> <p>【目標値】 ＜30 代以下の出品者割合（一般出品）＞ 15% (第 66 回実績：12.8%) ＜30 代以下の鑑賞者割合＞ 23% (第 66 回実績：21%)</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 作品募集にあたり、新聞広告のほか、Instagram や X (旧 Twitter) での広告配信を行った結果、30 代以下の出品者の割合は 15.2%となり、目標を達成した。また、昨年度に引き続き、展覧会開催の周知のため、9 月 23 日から 1 ヶ月間、YouTube において受賞作品の画像も使用した広告動画の配信を行った。アンケートの結果、30 代以下の鑑賞者の割合は 13.2%となり目標を下回った。※ ※前回(第 66 回)と同じ集計方法(会場受付での受付見た目年齢による年代別集計)では、30 代以下の鑑賞者の割合は 17.9%であった。 【課題】 開幕直後の鳥取会場では、新聞紙面による広報も活発であり、YouTube での広告開始も相乗効果となり若者の来場者数が多い一方、巡回展が進むごとに若者の来場率が下がっていく傾向にある。特に巡回順が最後となる倉吉会場では、新規の鑑賞者を多く呼び込むことができた一方、30 代以下の鑑賞者は例年と変わらず他の会場に比べて低調であった。(R5:8%、R4:11%)若者に向けた広報について、興味を引き付けるイメージの打ち出し方や広報実施の時期についてより工夫を行う必要がある。</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 新聞広告、Instagram、X で広告配信を行い、結果、30 代以下の出品者の割合が、目標値 15%に対して 15.2%となり、達成出来ている。 集客の面でもかなり積極的な広報がなされ、鑑賞者の鑑賞意欲を上げていた。また、倉吉会場が倉吉未来中心であったことも集客・鑑賞者の増加に大きく貢献していると思われる。交通の便や県展が目的でなくても気軽に鑑賞できる気軽さが評価できる。 【課題】 30 代以下の鑑賞者が 13.2%で目標(23.0)を下回っている。前回の集計方法と比較しても、今回は 17.9%で前回の 21.0%を下回っている。さらに、巡回展が進むにつれて、若者の来場率が下がる原因を分析する必要がある。また、来場者を昨年度と比較すると、境港で開催されなかったことがあるとしても、9,465 人が 7,309 人と 2,000 人も減少している。学生の鑑賞者数を増やすために、学校の部活での活用や学校の推奨などを勧めることも検討されたい。見た目年齢による判断は信憑性に欠ける面があり、アンケートの年齢項目への記入をその都度お願いするなど、受付担当者の声掛けがアンケート回収率の向上につながることを予想される。</p>
		<p>あなたが好きな作品賞について、これまで 1 部門につき 1 作品を投票することとしていたが、全部門の中からお気に入りの作品 3 点を選んでもらうこととし、より気軽に参加してもらえよう投票ルールの変更を行う。投票を通じ、多くの方に自分自身の視点で作品の良い点、好きな点などを考えながら、楽しく主体的にアート鑑賞を行っても</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 来場者のうち、観賞者投票を行った割合は 51.5%であり目標値は届かなかったが、2 年連続で過半数以上が投票に参加した。投票者からは、「賞を獲れなかった作品の中にも自分は好きだと思う作品が展示されていたので、新たな発見もできてとても面白かった」「作者の視点が素敵な作品を選んだ」などの意見があり、美術作品の鑑賞をより深いものとするため</p>	<p>達成度：概ね達成 【成果】 1 部門ごとに 1 作品を選ぶことから、全作品から 3 作品を選ぶことになったことから、より深く作品を鑑賞するようになったという声が多くなっていることから、この変更は効果があったと考える。 鑑賞者投票は、目標値に届かなかったとしても過半数は超えている。きちんと投票しようとすると思いのほか時</p>

		らう機会とする。 【目標値】 <あなたが好きな作品賞投票率>60% (第66回実績:54.8%)	のきっかけづくりを行えた。 【課題】 若者の投票率が低い※ことから、より気軽に投票に参加できる仕組みを検討する必要がある。 ※会場受付での見た目年齢による来場者年代別人数と、投票者数を比較すると30代以下の投票率は38%、最も多い70代以上では65%	間と労力がかかるため、気軽に鑑賞したいと思う層にとっては負担に感じるかもしれない。 審査員審査とは異なる基準で審査を行う鑑賞者投票の必要性を感じた。 【課題】 SNSに慣れている若者世代向けに、あなたが好きな作品賞の投票特設サイトのページを作るなど、時代に沿った新たな仕組み作りが望まれる。
	【前年度の課題】 ・新型コロナウイルス感染拡大により、全会場でギャラリートークを中止。感染対策を行いながら鑑賞者が作品を楽しみ、身近に感じられるような取組が必要。 ・来場者数が減少した倉吉は、県立美術館建設地であるので、更なる鑑賞者の掘り起こしが必要。			
「アート」が育む・「アート」を育む～人づくり～	子どものアート鑑賞・体験機会の充実	作品キャプションに学生からの出品とわかるよう表記を行い、県内の子どもたちの作品を広く県民に知ってもらおうとともに、特に制作者と同世代の子どもたちが創作活動への興味をもち、アートに対する親しみを感ずてもらえるような機会とする。 【目標値】 <10代以下の鑑賞者の満足度>90%	達成度：達成 【成果】 アンケートに回答した10代以下の鑑賞者(135人)のうち、「とても満足」または「満足」と答えた方は129人となり、満足度は95.5%であった。また本年度から、学生以下からの出品作品に対して、目録や作品キャプションでわかるよう記載を行った。10・20代以下の鑑賞者からは、様々な作品を見て楽しかった、自身の作品制作の参考になったなどのコメントもあり、美術に興味をもち、またそれを深める機会につなげることが出来た。	達成度：達成 【成果】 10代以下の鑑賞者の満足度が高いことは、今後の鑑賞行動に影響を与えるいい機会となっている。 また、目録・キャプションに(学)を記載することで、若者の作品をより深く鑑賞する機会につながると考える。
		県展・ジュニア県展の作品募集広報を一体的に行うとともに、令和元年度から引き続き、ジュニア県展とあなたが好きな作品賞の表彰式を合同で開催する。ジュニア県展出品者に対して県展の存在や県内の作家たちの優れた作品を知ってもらうことで、県展への出品が子どもたちの将来の目標のひとつとなり、創作活動への向上心の高まりや、アートへの関心をより深めるきっかけとなるよう取り組む。 【目標値】 <学生・18歳以下の出品者数割合>10% (第66回実績:7.9%)	達成度：達成 【成果】 作品の募集にあたっては新聞紙面に、県展・ジュニア県展の共同広告の掲出を行うとともに、SNS(Instagram、X(旧Twitter))では同時期に同じターゲット層に対して広告の配信を行った。意欲ある子供たちが県展の存在を知り、チャレンジできるよう工夫を行い、学生・18歳以下の出品者数割合は13.6%となった。また、あなたが好きな作品賞の表彰式会場では、賞状授与の際に受賞者の作品を会場のスクリーンに投影した。会場に同席していたジュニア県展の入賞者や保護者に県内の優れた美術作品とその作家について知ってもらうことが出来た。	達成度：達成 【成果】 学生の出品者数の目標10%に対して13.6%(前回7.9%)の結果となり目標を達成している。 県展とジュニア県展の共同広告やSNSの活用が若者に情報が届き、参加意欲につながっていると考える。 ジュニア県展とあなたが好きな作品賞の表彰式を合同で開催したことや、スクリーンに受賞作品を投影する試みで、来場者に出品作品や作家について知る機会の提供が出来ていた。
	【前年度の課題】 ・同世代の子どもたちにアートへの興味や親しみを感ずてもらえるよう、学生の作品には、キャプションにおいて学生の作品とわかるよう表示する工夫を。			
達成度集計(※5)			(10/12) ≙ 83%	(10/12) ≙ 83%

【定量目標・実績】

	目標	実績	(参考) 昨年度実績
⑬ アンケート回収率 (%)	55%	50.55%	53.9%
⑭ 観客満足度 (%) (※6)	90%	82.9%	81.1%
⑮ 入場者数 (名) (※7)	10,000 人	7,309 人 (4 会場分)	9,465 人 (※境港会場分を含む 5 会場分)

【自己評価総括】

【成果】

- ・定量目標としているアンケート回収率、観客満足度、入場者数の3項目のいずれも目標未達成であった。一方、前年度と比較すると、顧客満足度は上昇する(81.1%→82.9%)とともに、入場者数についても一日当たりの平均来場者数は、昨年の216.6人より増加し、221.4人となり、前年度を上回った。
- ・昨年度に引き続き、学生以下からの出品者数が増加し、集計開始(H21)以降過去最多の62点となり、前年度の34点を大きく上回った。このうち、特に高校生からの出品数が増加した(R4:16点→R5:40点)。令和4年度より学生を対象に限定としたコンクール(高総文祭など)に出品した作品も応募可能となるよう出品規定を改定したところであるが、改定から2年目となり、各学校での周知が進んだことも要因の一つとして考えられる。県展賞・奨励賞へも計5名の中学生・高校生・短期大学生が入賞しており、県展が幅広い世代の優れた作品を発表し、広く県民の芸術活動を振興する機会となっている。
- ・アンケートでは、県展を初めて鑑賞したという方が最も多く、初鑑賞者の満足度は84.5%と全体平均より高かった。特に倉吉会場は、本年度、臨時会場として倉吉未来中心での開催となったが、複合施設での開催であったため、施設内に別の用事で来ていた方がたまたま立ち寄りなど、初めて県展を鑑賞する来場者が多く、全体の42.2%となった。作品鑑賞を通じて、より多くの県民に文化芸術に親しみ、関心を持ってもらうきっかけにつながる機会を創出することができた。

【課題】

- ・各会場で9日間(倉吉会場は前期・後期あわせて6日間)、合計33日間の作品展示を行い、7,039人(前年度:8,665人(4会場で計40日間の会期))の来場があり、一日当たりの平均来場者数は、昨年の216.6人より増加し、221.4人となった。一方、米子会場では一日当たりの平均来場者数が前年度271人から231人に大きく減少した。開幕前後はメディアでの取り上げも多く県民からの注目度も大きいですが、会期が進んでいくにつれて開催情報の周知が行き届きにくくなっているため、巡回展以降の広報について、地元の方々に広く認知してもらえるよう、効果的な広報の方法を検討したい。

【その他事業に関する意見、感想など】

- ・人件費・物価の高騰による委託業務の経費の肥大化や、事業者の人手不足等の問題に対応するため、本年度から県展の受付日を早めるとともに複数日に分散(東部8/19 中部8/26 西部:8/27)し、審査会日程についても2日間に分けるなど運営方法の変更を行った。また、会期についても原則1施設につき10日間としていたところ、9日間の実施としたが、受付日に地区ごとで1週間程度の差が出たことについて、公募展として応募者に差が出ないように受付日を設定すべきとの意見が審査員や出品者より寄せられた。次年度以降、出品者に不利益が生じないよう受付日程の見直しを行う。
- ・新型コロナウイルスの流行時には、作品受付時間を部門ごとに午前・午後に分けていたところ、これを解除して受付を実施した。これにより、受付開始直後の時間帯に個人の出品者及び代理搬入の事業者が集中してしまい、会場が大混雑することとなった。次年度以降同様の状況とならないよう、個人と事業者の持ち込みの時間を分けるなど、対策を行う予定である。
- ・近年、物価等の高騰や県内事業者の人手不足、審査員や無鑑査作家などの高齢化など展覧会の実施にかかわる様々な状況が大きく変化しており、長い間行ってきたこれまでのやり方を見直す転換期となっている。出品者や鑑賞者、県展の運営にかかわる関係者から意見を頂きながら、事業の目的の達成と無理なく持続可能な方法が両立される展覧会となるよう検討を行っていく必要がある。

【総括】

【成果】

<全体>

- ・目標値については未達成であったが、前年度に比較して、顧客満足度は上昇する(81.1%→82.9%)とともに、入場者数についても一日当たりの平均来場者数は、昨年の216.6人より増加し、221.4人となり、前年度を上回っている。
- ・アンケートでは、県展を初めて鑑賞したという方が最も多く、初鑑賞者の満足度は84.5%と全体平均より高かった。
- ・アンケートを見ても概ね好評で、各会場盛況であったことが伺える。
- ・さまざまな分野の作品を一度に鑑賞できることは本事業の魅力であり、楽しむことができた。
- ・各部門に掲示されてある作品全体の解説は、素人にも分かりやすく、作品鑑賞のガイドとして、ぜひ来場者に読んで頂きたい。

<出品>

- ・昨年度に引き続き、学生以下からの出品者数が増加し、特に高校生からの出品数が増加した（R4:16点→R5:40点）。県展賞・奨励賞へも計5名の中学生・高校生・短期大学生が入賞しており、県展が幅広い世代の優れた作品を発表し、広く県民の芸術活動を振興する機会となっている。
- ・積極的な SNS を使った作品募集などが 30 代以下の出品者の目標値達成に効果があったと思われる。
- ・部門によっては若い世代の出品が多くみられたことも大きな成果の一つであった。

<会場>

- ・倉吉会場が倉吉未来中心であったことも集客・鑑賞者の増加に大きく貢献していると思われる。交通の便や県展が目的でなくても気軽に鑑賞できる気軽さが評価できる。
- ・日南会場での鑑賞であったが、コンパクトにまとめられた県展は、米子などの大規模会場で鑑賞する県展とはまた趣がことなるものであった。その魅力の一つは、優れた作品をある程度の時間で鑑賞することができることであった。

<あなたが好きな作品賞>

- ・鑑賞を【自分ごと】としてより身近に捉えることができる良い企画だと思う。
- ・投票方法を変更して投票しやすくなったことも好印象だった。
- ・良い作品が多く並び、アンケートには選びきれないという声が多数聞かれた。「あなたが好きな作品賞」は3作品以上の選択が望まれる。アンケートにも記載があったが、ヤング賞やスポンサー賞など賞の種類が増えると、出品者のモチベーションアップにもつながる。

【課題】

<広報>

- ・会期が進んでいくにつれて開催情報の周知が行き届きにくくなっているため、巡回展以降の広報について、地元自治体の広報の協力を求めるなど、地域の方々にも認知してもらえるような、効果的な広報の方法を検討されたい。

<若年層への対応>

- ・若い世代の来場者を増やすため学校行事の一環として県展の鑑賞を行うなど、個人ではなく、学校、団体での鑑賞を行えば、若者の来場者数も増えるのではないだろうか。
- ・部門によっては若者の出品が増えている。現代の若者は、スマートフォン、パソコンなどでアート作品を作成しているので、デジタル部門的なものを新設するとさらなる若者の出品、来場者が増えると思われる。
- ・対象年齢から外れていたのか、Instagram や X で広告を流された期間中、実際に広告を見る機会が無く残念であった。また、ハッシュタグで検索をかけると、両 SNS 上で投稿がほとんど表示されない（Instagram で3件、X で0件）。主催者側が積極的に県展に関連する投稿を増やし、若者の関心を増やす機運を高めたい。

<定量目標>

- ・定量目標がいずれも未達成だったことは次年度の課題である。

<会場>

- ・今回の倉吉会場は、倉吉未来中心だったこと、しかも1階と2階に掲示場所が分かれていたため、2階の会場内では「どこに行ったら良いかわからない」など混乱する声が複数聞かれた。1階の受付担当者は、入場時に2階の会場案内を丁寧にして下さっていたので、2階にも展示があることを事前に把握出来て、移動がスムーズだった。
- ・倉吉博物館が工事のため、倉吉会場は選抜作品のみの展示となり、全体的に寂しい印象であった。

<審査会>

- ①審査会(1日目)において、十数名の見学希望者の中で2名の方が最後まで審査会場に案内されず、1階受付で1時間以上経った時点で不信に思われ自ら審査会場にいらして困惑されていた。誓約書まで書いて審査見学に臨んでいらしたのに事務的なミスならば改善を求めたい。そのうちお一人の方は午前中の審査を見学に米子からわざわざいらしていたとの事。「誰もがアートに親しむことができる機会の充実と環境整備」と取組目標にある。審査会见学という一般の方に開かれた場の提供はとても良いと思うので今後につながるような改善を求めたい。
- ②洋画の部門において、高校生の作品数点が、規格外(額無し?)とのことで審査の対象から外されていた。規格外であることは作品搬入・受付の際に出品者に伝えるべきであり(出品規定にも作品規格を満たさないものは受付できないとある)、審査会場にあるということは受付けたものと思われる。受付けたのであればとりあえず審査されるべきだと思った。もし、目標値に挙げられている〈学生・18歳以下の出品者数の割合〉の13.6%に規格外として審査されなかった作品が入っているとすれば大きな問題であると思う。また、若い世代の鑑賞者を増やすためにも同世代の出品者の存在は貴重であると思われる。運営側の今一度の見直しと改善を期待する。

- ③写真・洋画部門の審査会場において、作品を審査する場所の照明が暗く、ライトの当たり方や位置にも改善・配慮が必要と感じた。
- ④昨年度の意見から、版画・彫刻・日本画・デザイン部門は作品とタイトルの提示について改善されたと聞いていたが、他部門では改善されていなかった。一点ずつのタイトルの読み上げではなく作品の一部でもあるタイトルの表示(パソコンなどからのスクリーン表示など)は、審査時間の短縮にも繋がると思われるため、更なる改善を求めたい。作品受付の際に、部門別の通し番号とタイトルの紐付けなどその場でのパソコン入力・管理などできればと思う。搬入受付を部門別や個人・業者別で時間を設定するとかも混雑やその場でのパソコン入力・管理などに繋がるように思う。

【その他事業に関する意見、感想など】

<今後の県展について>

- ・展覧会のやり方を見直す転換期とされているが、事業の目的達成と持続可能な方法が両立される展覧会となるよう慎重に検討されたい。
- ・今年度で68回を数える県展であるが、時代も移り変わり更に回を重ねていく為には様々な面での改善が不可欠かと思う。今後の取り組みに大いに期待する。
- ・日頃、芸術活動をしていない人が興味を持つようなきっかけ作りになるものが県展開催前にあると良い。
- ・デジタルアート(映像やグラフィックなど)のようなものも対象としてはどうか。

<ギャラリートーク等>

- ・ギャラリートークは、作品への理解が深まり、審査員の視点も大変勉強になる。倉吉会場でも、ギャラリートークが開催されることが望ましい。
- ・出品者、あるいは評価者によるトークライブ的な企画を増やしてほしい。

<会場について>

- ・倉吉会場は、せめて倉吉博物館で開催してほしかった。また、2日に分けて開催されたことで、良かった点、悪かった点を聞きたい。未来中心で開催することで、通りすがりの人も鑑賞されたということですが、広くたくさんの方、普段美術展に足を運ばない人も訪れたことはいいのですが、会場が狭すぎて、作品数も鳥取会場の半分ほどで、がっかりしたこと、ゆっくり鑑賞する雰囲気壊していたのでは。
- ・日南会場は、展示の仕方に工夫がされていて、鑑賞はしやすかったが、鳥取会場を鑑賞してから比べると作品数が少なく、時間をかけて足を運んだ割には期待外れだった。

【文化芸術事業評価シート】

		自己評価		評価委員による評価
目的	取組目標 (※1)	行動計画 (※2)	達成度(※3)及び 評価理由(※4)	達成度及び評価理由
「アート」 に親しむ ～環境づ くり～	文化芸術 活動者の 発表や創 造の機会 の提供	鳥取県で活躍するクラシック音楽の優れた演奏家を集めた音楽祭を 1 か月半に渡り、23 公演開催いたします。県民の皆様は音楽芸術鑑賞の機会を廉価で提供するとともに、県内のクラシック音楽の演奏家及び演奏団体の活動振興を図り、演奏レベルの向上と成るべく、頂点の伸張を図ることを目的とする。県内在住者のアクセスのしやすさを企図して、県の中央に位置する倉吉未来中心、倉吉交流プラザ、倉吉シティホテルを会場とし、各演目の時間帯を設定している。	達成度：達成 【成果】全公演無事に開催でき、今年も質の高い音楽祭を実施することができました。例年続けて出演している演奏家も昨年よりレベルが向上し、目的とされる頂点の伸張を図ることに貢献できました。また、来場者アンケートにおいても、満足度 93%という高い評価を得ており、県民の皆様へ広く質の高い音楽芸術の鑑賞機会を提供することができました。	達成度：達成 【成果】 ・今回で 40 回目となる歴史ある音楽祭として、オープニング・コンサートからファイナル・コンサートまで約 1 か月半に渡り、本県で活躍するクラシック音楽の優れた演奏家や県内で活動する合唱団などの団体による 23 もの多彩な公演を、質の高い内容で実施することができた。 ・これにより演奏家及び演奏団体の発表機会の提供やレベルの向上につながるとともに、県民に 700 円という廉価で本格的なクラシック音楽の世界、多様性や奥深さに触れることのできる質の高い音楽芸術鑑賞の機会を提供することができた。 ・演奏家と県民を結びつける素晴らしい音楽祭の開催を通じて、「アート」に親しむ環境づくりにつながることができた。
		オープニング・コンサートに倉吉未来中心大ホールにて、県内外のプロ演奏家で編成された「アザレア室内合奏団」による質の高いコンサートを実施し、広く県民に一流の音楽へ触れる機会を提供する。また、ファイナルコンサートとして、同じく倉吉未来中心大ホールにて、県内合唱団による「合唱の祭典」を開催し、優れた環境での発表機会を提供し、活動振興につなげる。さらに、サロンコンサート企画として、民謡、中学生吹奏楽による無料コンサートも実施し、クラシックコンサートだけでなく、様々なジャンルの文化芸術に触れる機会の提供を行う。	達成度：達成 【成果】オープニングは質の高いコンサートを広く県民に提供することができました。ファイナルコンサートにおいても、県内中部地区 8 つの合唱団が一同に会し、また出演合唱団による全体合唱も行いました。アトリウムコンサートは中部地区 6 校の中学生がそれぞれ演奏し、また民謡の発表も行い、多くの方に来場していただきました。	達成度：達成 【成果】 ・オープニング・コンサートでは、6 年ぶり 3 度目の出演となる本県出身のトランペット奏者尾崎浩之氏をはじめ県内外のプロ演奏家で編成された「アザレア室内合奏団」等による会場ホールの響きをフルに生かした質の高いコンサートを実施した。これにより目標は達成できなかったものの昨年度を 100 名以上も上回る観客の入場とともに、93%という観客満足度という高い評価となるなど、広く県民に一流の音楽へ触れる機会を提供することができた。 ・オープニングやファイナルコンサートにおいても地域の幅広い年齢層や様々なジャンルの団体を巻き込み、表現する場の創造や鑑賞機会の充実に貢献することができた。

	【前年度の課題】 ※前年度評価対象外			
「アート」が育む・「アート」を育む～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会の充実	<p>アザレア音楽祭のコンサートは全て 700 円となっており、大人、学生、子どもに関わらず、廉価で一流の音楽に触れる機会を提供することとしている。また、中部圏域の中学校、高校、短大、大学へはオープニング・コンサートの招待券を配布し、学生・生徒が本格的なコンサートへ参加するきっかけ作りに取り組む。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】料金設定を廉価に設定しており、昨年よりオープニングは 100 名多く、総来場者数も 170 名の増となり、多くの方に来場いただきました。若者の参加が課題ですが、今年は招待券も多く配布した結果、アンケートの回答結果よりの算定ですが、2%から 3%と昨年より 10 代の来場は 1%多くなりました。</p> <p>【課題】継続して聴衆の若返りが課題です。また、昨今の物価高騰により、運営面も考慮し、料金設定は見直す必要があります。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・料金設定を 700 円という廉価に設定し、聴衆が足を運びやすい仕組みを作るとともに、中部圏域の中学校、高校、短大、大学にオープニング・コンサートの招待券を配布して学生・生徒が本格的なコンサートへ参加するきっかけ作りに取り組み、推計値ながら昨年度より 10 代の来場は 1%多くなるなど、子どもたちがアートを鑑賞する機会の充実にもつなげた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープニング・コンサートは 1000 円でも十分満足できる内容であり、運営面で課題があるのであればプログラムによっては価格を引き上げることも選択肢の一つなのではないか。 ・若者層の集客は他の多くのイベントでも課題となっている。学生・生徒へ配布する招待券に印を入れること等により、入場した学生・生徒の数をより正確に把握することなどを通じて、招待券配布の効果を検証してみることも必要ではないか。また、若者により訴求する広報手段の検討など、より子どもたちの参加を一層促す取り組みを期待する。
		<p>学生が参画する機会の提供として、県内中学校の吹奏楽部へ出演を打診し、発表機会の提供を行っている。また、この企画は無料とし、広く県民の方が鑑賞できるよう実施する。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】従来は中学生による合同合奏を行っていましたが、コロナ禍にあつて合同は難しく、中部地区 6 校 70 名の参加がありました。実施時には、コロナ感染症の扱いが 5 類に移行されたこともあり、聴衆は多く、鑑賞機会の提供はできました。</p> <p>【課題】通年と会場が変わっていたこと、複数校の参加ということで、控室などの準備や、運営面において難しいところもあり、次回以降どのようなスタイルで行うかを精査し、準備することが課題です。</p>	<p>達成度：概ね達成</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続きコロナ禍の影響もあつたため従来のような合同合奏の機会は提供できなかったが、県内中学校の吹奏楽部 6 校 70 名の発表機会の提供を行ない、たくさんの観客の前でのライブ感など普段出会えない刺激も創出するとともに、この企画を無料とすることで、子どもたちをはじめ広く県民の鑑賞機会を提供することができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・従来のような合同合奏の再開を含め、新しいやり方やスタイルを試して、より多くの子どもたちの発表の機会やクラシック音楽に出会ってよかったと思える機会が増えることを期待する。
【前年度の課題】 ※前年度評価対象外				

「アート」 で元気に ～地域づ くり～	地域にお ける文化 芸術の活 性化	<p>アザレア音楽祭は、地元の演奏家が地域で演奏する機会の提供を行い、演奏家の技術レベルの向上と、聴衆の文化レベルの向上に努めている。また、アザレア音楽祭は、地元企業や、聴衆の協賛という協力を得て運営しており、地域に支えられている音楽祭となっている。身近に触れられるコンサートとしてサロンコンサート形式をとっており、誰もが参加しやすいコンサートとして、40年の実績と成果が積み重なった全国に類を見ない音楽祭へと成長している。</p>	<p>達成度：達成 【成果】サロンコンサートとして、20公演を行い、常連演奏家だけでなく、新規の演奏家として、3名を招集し、フルート、声楽、リコーダーの演奏を行いました。地域に多くの演奏家の存在を周知し、魅力ある演奏会を提供できました。スポンサー企業として、中部の企業14社、協賛に企業、個人より120件の支援があり、コロナ禍で激減した1昨年より、スポンサー2件、協賛10件の増となり、コロナ以前の状態に戻りつつあります。アンケートにも続けて欲しい旨の内容が多く、まさに地域に根付いた音楽祭となりました。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 ・地元の演奏家が地域で演奏する機会の提供を通じて、演奏家の技術レベルの向上と、聴衆の文化レベルの向上につながるるとともに、魅力ある演奏を提供できるよう新規の演奏家3名の参加を得るなど地域に多くの演奏家の存在することを県民に周知することにつながった。 ・また、スポンサーや聴衆の協賛という形で地域の協力を得て運営するとともに、敷居が高いクラシック音楽をより身近に感じられるサロンコンサート形式をとるなどの工夫をすることを通じて、地域に支えられ誰もが参加しやすい地域に根付いた音楽祭となっており、地域における文化芸術の活性化に貢献している。</p>
		<p>アザレア音楽祭は地域の演奏家、団体による、自主企画コンサートを開催期間中に織り込み、共に地域の活性化に努めるべく、コンサートの実施運営をサポートしている。今回も、最終日のファイナルコンサートにおいて、第1部に鳥取県内で精力的に活動しておられるコーラスグループによる合唱の祭典を、第2部は毎年ゲストを変え、今年度は鳥取オペラ協会によるオペラガラコンサートを実施し、両公演を通じて、地域全体における文化芸術を活性化させ、地域に根付いた音楽祭としていく。</p>	<p>達成度：達成 【成果】中部圏域8つの合唱団の参加、倉吉市のみつぼし盆踊り保存会の参加など、地域で活動する文化団体が参加し、ファイナルコンサートにおいては、合唱団の自主的な参画を促し、実施できました。鳥取オペラ協会の参加により、地域にオペラの魅力を発信でき、地域の文化振興に貢献できました。</p>	<p>達成度：達成 【成果】 ・中部圏域8つの合唱団、みつぼし盆踊り保存会など、地域で活動する文化団体の自主企画コンサートを盛り込みその実施運営をサポートすること等を通じ、地域全体の文化の活性化につなげることができた。 ・ファイナル・コンサートでは合唱とオペラという同じ「歌う」という表現方法でも歴史や文化的背景も異なるジャンルの公演を組み合わせた魅力的なプログラムとなっており、地域の文化芸術の活性化につなげることができた。</p>
【前年度の課題】 ※前年度評価対象外				
達成度集計(※5)		(16/18) ≒ 89%	(16/18) ≒ 89%	

【定量目標・実績】

	目標	実績	(参考) 昨年度実績
⑯ アンケート回収率 (%)	25%	48.0%	45.0%
⑰ 観客満足度 (%) (※6)	70%	93.0%	93.0%
⑱ 入場者数 (名) (※7)	6,000人	550人	445人

【自己評価総括】

<p>【成果】 アザレア音楽祭は、クラシック音楽をメインに据えたものであり、現代のマイナーなイメージを背負っています。そんな中で、地元在住の演奏家を敬愛し、愛聴し続けていただくことを目標としたアザレア音楽祭を40年間も開催し続けられたことは、大きな成果だと考えています。この間に、アザレア音楽祭に出演し、</p>

体験した多くの若者が、プロの演奏家として育っていったことに誇りさえ感じています。そして、何よりも優れた演奏家たちが、鳥取県内に遍在し、地域社会の芸術文化の核として根付いてきたことです。

【課題】

アザレア音楽祭の目標は「優れた音楽芸術体験」を提供することではありますが、音楽分野に好みの偏りが生じ、観客動員にムラが生じています。滅多に聴けない「ホルン」、「ファゴット」などの、ハイレベルな演奏も、なじみが薄いため観客動員が少ない現実があります。更なる啓発が必要だと考えています。また、出演者の音楽的なレベルが年々向上し、新人枠を設定していても、参加を躊躇する若手演奏家が存在し、何らかの対策を模索するのを感じています。また、県内で著名に成った演奏家が、廉価な入場料のコンサート出演を渋る傾向が生まれている現実もあります。

運営面では、廉価なコンサートはレベルの低いものとの固定概念が強く、アザレア音楽祭のコンセプト(レベルの高いコンサートを廉価で提供する事)が理解されがたい問題が近年とみに増大しています。アンケート調査では、入場料の値上げを示唆する意見が増しつつあり、対応を考えています。また、運営役員の数が不足している問題が常態化しています。そこで、実行委員の公募を行い、適正な役務をこなせる仕組み作りが必須だと考えています。

【その他事業に関する意見、感想など】

アザレア音楽祭では、簡易にCDが作れる環境が出来て以来、約30年弱に亘って、全公演の記録CDを作成し、倉吉図書館に寄贈し、公開保存していただいています。県内で開催される地元文化活動としてのコンサート(文化団体の各種公演、オーケストラ連盟のコンサート、第九公演、オペラ公演、各ホールの自主公演等)の記録CDを、県立図書館等において保存する活動を願っています。公共機関である図書館等が積極的に収集しなければ、活動成果たる鳥取県の音楽文化遺産が失われることとなります。美術や文学は残りやすく、後世の人々への伝播は可能ですが、音楽は音が残ってこそ意義を持ちます。各種文化団体で、記録を作り、県立図書館に納める慣習が生まれることを願っています。

【総括】

【成果】

＜演奏家の育成と芸術文化レベルの向上＞

・40回という節目を迎え、その長い歴史の中で大きな役割を担ってきた。県内在住の演奏家にとっては、貴重な発表の場となっており、演奏家の自己研鑽の好機となってきた。一方、様々な内容のコンサートに参加できる聴衆にとっても廉価で気軽に足を運ぶことができ、クラシックのジャンルの興味を広げることができ、地域社会の芸術文化のレベルを上げる結果に大いに貢献してきている。

＜運営上の工夫＞

・地元企業や、聴衆の協賛という形で地域の協力を得たり、サロンコンサート形式をとるなど運営上の工夫をすることを通じて、地域に支えられ誰もが参加しやすい音楽祭となっており、地域における文化芸術の活性化に大きく貢献している。

＜イベントとしての定着＞

・40年の実績と成果が積み重なった全国に類を見ない音楽祭へと成長しており、本年度についても、オープニング・コンサートでは一部目標達成できなかったものの、期間を通じて入場者数、アンケート回収率、観客満足度共に目標・昨年度実績を上回る実績をあげるなど、初夏の倉吉を音楽で彩る地域活性化イベントとしても定着している。

【課題】

＜プログラムの工夫＞

・アンケート集計によれば、同じ倉吉交流プラザ視聴覚ホールで実施されたコンサートでも観客動員に大きな差が(最小22名、最大118名)生じている。なじみが薄い楽器等では演目をなじみあるものとするなどプログラムの工夫や可能であればなじみの薄い楽器についてはその特性などを紹介する場面を設けるなども必要ではないか。

・親しみやすさという点でメドレーでもいいので、王道のクラシックの名曲があるとよい。

・今後も長く続けていくためには、今までの反省点を精査し、演奏家の新たな起用やフレッシュなプログラム構成を採用することも必要である。

＜若年層の取り込み＞

・アンケート集計によれば観客のうち50歳以上が全体の87%を占めており、若年層の取り込みが課題と考えられる。ハイレベルながら初心者や子どもたちでも楽しめるプログラムを準備することなどにより、若年層の取り込みを図ることができないだろうか。また、若者により訴求する広報手段の検討など、若年層の参加を一層促す取り組みを期待する。

＜運営面＞

・実行委員の公募等、未来へ向けての仕組み作りが必須である。

・演目によっては入場料の値上げも致し方ないのではないかと。

【その他】

・アンケートでも指摘があったが、パンフレットをもう少し見やすくする必要がある。(文字が小さく読みづらい。)

【その他事業に関する意見、感想など】

<アンケートについて>

・アンケートの感想にはかなり深く切り込んだ意見が多くあり、それに対してディレクターが丁寧に回答しておられる姿勢には感心した。この取組の積み重ねが、レベルの高い聴衆を育てているように感じられた。

・アンケート結果が HP で紹介されており、主な感想や提言に対するディレクターの回答も載せられており良い取組と思った。これまでの他事業ではあまり見たことなく、参考になるのではないかと。

<「アザレア室内合奏団」について>

・「アザレア室内合奏団」のレベルの高い演奏に感服した。曲目はバロック音楽を中心としたプログラムで構成され、一般的な聴衆にはやや難しい曲目が並んでいたにもかかわらず、聴衆がとても興味を持って集中して聴いていた姿が見受けられ、歴史ある音楽祭の中で聴衆のレベルも高くなっていると感じた。

<コンサートマナーについて>

・コンサートマナーが徹底されていないのが気になった。(曲の最中のおしゃべり、楽章と楽章の合間など曲の終わりではないタイミングでの拍手など)

・オープニングコンサートでのソリストへの対応が気になった。プログラムに掲載されているのにステージ上では他の演奏家と同じ扱いでソリストに向けての拍手もなく、とても違和感を覚えた。クラシック音楽の鑑賞・聴衆の文化レベルの向上の観点からも、この演出(対応)でよかったのだろうか。

<その他>

・40年も運営を継続し演奏家の育成、県民へ芸術文化の鑑賞の機会を与え続ける情熱が素晴らしい。

・パンフレット冊子の記載内容が充実しており感心させられた。

(参考)

鳥取県文化芸術事業評価委員会委員名簿（令和5年度事業評価）

氏名	所属等	備考
石谷 依利子	砂丘 YOGA 代表	
荻原 恵子	フォークダンス、レクリエーションダンス、 日本民謡指導者	
嘉賀 収司	境港市民図書館館長	
門脇 明子	音楽家	副会長
川口 朋子	DANCE for REAL 代表	
小林 圭子	ミュージック・オフィス♪DoReMi 代表	
谷口 透	鳥取大学地域価値創造研究教育機構副機構長	
野川 貴代子	米子市文化協議会	
村田 速実	打吹童子ばやし代表、社会福祉法人みのり福社会理事長	
山川 智馨	鳥取短期大学幼児教育保育学科助教	
山本 仁志	前鳥取県教育長	会長
渡邊 寛智	島根県立大学短期大学部保育学科准教授	

※令和6年3月末時点

事業別評価報告書執筆担当一覧

番号	事業名	主体	団体名	実施日	実地検証 委員数	執筆担当
1	第21回鳥取県総合芸術文化祭・ とりアート2023 東部地区事業	鳥取県総合 芸術文化祭 実行委員会	東部地区企画運営 委員会	令和5年 11月18日(土) ・19日(日)	1	荻原委員 石谷委員
2	第21回鳥取県総合芸術文化祭・ とりアート2023 中部地区事業		中部地区企画運営 委員会	令和5年 11月18日(土) ・19日(日)	1	小林委員 川口委員
3	第21回鳥取県総合芸術文化祭・ とりアート2023 西部地区事業		西部地区企画運営 委員会	令和6年 1月7日(日) ・8日(月・祝)	1	嘉賀委員 門脇委員
4	とっとり郷土芸能まつり2023	鳥取県	地域社会振興部 文化政策課	令和5年 10月21日(土)	1	渡邊委員 嘉賀委員
5	第67回鳥取県美術展覧会			令和5年 9月16日(日) ～11月3日(金)	4	谷口委員 山川委員
6	第40回アザレア音楽祭2023	鳥取県文化 団体連合会	鳥取県音楽祭サミ ット、アザレア音 楽祭実行委員会	令和6年 5月14日(日)	1	山本委員 門脇委員

評価委員会の開催状況

回数	開催日	報告・協議内容
第1回	令和5年4月28日	1. 協議事項 ア 令和5年度評価方針について イ 令和5年度評価対象事業について ウ 令和5年度評価事業の実地検証・執筆担当について
第2回	令和6年3月12日	1. 審議事項 令和5年度事業別評価報告書案について 2. 事業実施者への評価報告及び意見交換 ・第40回アザレア音楽祭2023 ・とっとり郷土芸能まつり2023

鳥取県文化芸術事業評価委員会設置要綱

(目的)

第1条 県が実施又は助成する文化芸術事業のうち、次条に掲げる事業を年度ごとに点検することにより、当該事業における良質な作品創造や県民の文化芸術事業への鑑賞、参加の機会の充実及び効率的な事業の運営方法を確立することを目的に鳥取県文化芸術事業評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(評価対象事業)

第2条 評価対象事業は、委員会と県が協議のうえ、次に掲げる事業のうちから選定する。

- (1) 鳥取県総合芸術文化祭主催事業
- (2) 鳥取県文化団体連合会加盟団体助成事業

(委員会の任務)

第3条 委員会は、鳥取県附属機関条例（平成25年鳥取県附属機関条例第53号）別表第1で定める事項を調査審議するものとし、委員会の任務の具体的内容は次の各号に掲げる事項とする。

- (1) 評価に係る実施方針の決定
- (2) 評価項目の作成及び調整
- (3) 評価報告書の作成、公表及び評価報告会の開催
- (4) 評価対象事業における改善が必要な事項の指摘
- (5) 被評価者が作成する改善計画の承認

(委員の任務)

第4条 鳥取県文化芸術事業評価委員会の委員（以下「委員」という。）は、作品の鑑賞・実地検証及びアンケート調査資料等に基づく評価を行う。なお、評価対象事業の企画・立案に関わる者は、当該事業の評価を行うことができない。

- 2 委員会は、複数年にわたり改善が認められない評価対象事業について、県に対し補助金支出の妥当性に係る説明を求めることができる。

(組織)

第5条 委員会は、県民（県内在勤者を含む。）で、調査審議する事項に関し知識又は経験を有する者のうちから、知事が任命する。

- 2 委員会は、委員15名以内をもって組織する。

(会長)

第6条 委員会に会長を置く。

- 2 会長は委員の中から互選する。
- 3 会長は、会務を総理し、委員会を代表する。
- 4 会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名する委員が、その職務を代理する。

(任期)

第7条 委員の任期は2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

- 2 委員は、再任されることがある。

(会議)

第8条 委員会の会議は、会長（会長が定まる前にあつては委員会の庶務を行う所属の長）が招集し、会長が議長となる。

- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができない。
- 3 会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。
- 4 会議には、会長が必要と認めるときは、委員以外の者に出席を求めることができる。

(事務局)

第9条 会議の事務を処理するため、鳥取県地域づくり推進部文化政策課に事務局を置く。

(要綱の改正)

第10条 この要綱の改正は、会議の決議を受けなければならない。

(補則)

第11条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、会長が委員会に諮り、別に定める。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、平成26年1月15日から施行する。
- 2 平成25年度中に任命する委員の任期については、第5条第2項の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、平成27年7月15日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、平成28年2月5日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この要綱は、令和元年7月24日から施行する。

令和5年度鳥取県文化芸術事業評価報告書

令和6年4月

〒680-8570

鳥取市東町一丁目220番地

鳥取県文化芸術事業評価委員会（事務局：鳥取県地域社会振興部文化政策課内）

電話：0857-26-7839

ファクシミリ：0857-26-8108